
魔王と勇者の契約

弥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者の契約

【Nコード】

N0161M

【作者名】

弥月

【あらすじ】

出会った魔王は子供でしかもそれが呪いのせいとか!!
倒しにきた勇者の立場なのに呪いとく協力って……。
しかも出会う住人も変わった人達ばかり!!
もう突っ込む僕の身にもなってくれ……

1話 出会い

「これが魔王？」

出会った瞬間に緊張感が一気に吹き飛んだ。
逆に驚きを隠せず声が裏返る程だ。

だって……

まだ子供じゃん！！

思い切り叫びたいのを押さえつつ、見つめてしまう。

漆黒の髪が艶やかに輝き、濃い藍色瞳は勇者っていうか僕を睨み付けている。

子供特有のふっくら頬っぺたが印象的だけど……。

睨んでいても全然怖くないし、寧ろ可愛い部類に入る方だなと思ってしまう。

「おい、勇者。貴様まさか！！可愛いなどと思ってないだろうな？」

ずっと思つめたのが、魔王にとって不快に思えたのだろう。

子供らしかなぬ眉間にシワを作り魔王は嫌々そうに言うが、そんなこと僕は気にせず

「思ってるけど。君、本当に魔王なの？」

「ぶっ無礼な！そつそれに君言うな！！これでもれっきとした魔王なんだ！！……うう呪いさせなければ」

「呪い？」

呆然としてしまっただってそうだろう。

というか開いた口が塞がらないとでも言うか……。

魔物一強くて賢く、人間にとって最大の敵が”魔王”って誰しも思うから。

でも実際は子供だし、尚且つ呪いにかかっているなどと言うのだから……

本当に”魔王”かも疑いたくなる。

僕の心情を感じたのか魔王は吐き捨てるように言う

「うつ疑ってるだろ！！分かるんだかなら！！貴様の目語ってる」

今にも泣きそうな面だ。

「別に信じなくてもいいが……」

「信じるよ。」

立派そうな椅子に座ってるし」

「そこかよ！！」

笑顔で言ってみたが、予想以上に反応が返ってきた。

面白い。

つつい弄りたくなりさらに「それに大きくなれば魔王ばい威厳付きそうだしね」って僕は言ってみた。

「ぽいつてなんだ！？！ぽいつて！！それにやっぱり信用してないじゃないか！！」

次々に勢いよく突っ込む魔王は顔を真っ赤にして反論してくる。

必死な姿がまた可愛い。

ああ、僕はこんな魔王を本当に倒さなければいけないだろうか。

無害そうな魔王を……

2話 実は…

思っではいけない事を考えてしまった。

だって相手は魔王だ。

例え見た目が可愛らしく、

怒ったときに頬っぺたが真っ赤に染まって、

これまたプリティーでもって変態か！？僕は！！

このままではいけない。

気持ちが悪く着かないのがはっきりわかるし、
だから出来るだけ平常心を装うとしたとき。

「勇者。大丈夫か？」

「へっ？」

「だから気は確かかと聞いている」

さつき真っ赤に染めた頬っぺたの赤みは薄い紅色に落ちつき。
魔王も冷静さを取り戻しているように見える。

「えつまぁ……大丈夫です」

倒さなきゃいけない相手なのに心配された……。
どんな話だよ！内心ツツコミを入れたが。

「勇者の事は噂で聞いてはいたがまさか女性だとは思ってなくてな」

「何で！？！？知って！！」

驚いた。勇者であつても女つてだけで人の態度は違った。だから常に男装してたのに。

こんな簡単に見ただけで判断出来るほどぼろは出てないはず。仲間の魔法師や剣士が旅を一緒にして、数週間気付かれないほどの徹底して完璧に化けていたはずだった。

魔王は気にせず淡々と、

「ああ、オーラで性別何てわかるからな」

「そつか！！ってええ！！」

「だが勿体ないな。瞳は綺麗な深緑だし、肌は白いし、その朱髪は伸ばしたらきつと可愛らしいお嬢さんなのにな」

「っ！！」

思わず大分短い髪を手で押さえた。

今までそんなこと言ってくれる人には出会わなかったし、似合わないと思ったから尚更驚いた。

頬に熱を感じる。

「なっ！ナニ言って！！」

「そうですよ！！何口説いてるんですか魔王様」

「あっノア」

突然現れた美男子さん……。
本当カーテンの裏が出てきたのっかって位今までドコに居たのか…
…。

「あの……どちら様でしょうか？この美男子さん。」

「それは……追々話す」

銀髪の長い髪が腰まであり尖った耳は魔族の証なので考えてきつと側近だろうが。
魔族にしては珍しい白いロープを来ており、落ち着いた大人の気配を感じた。

「もう！ちゃんと色々説明してあげないと解けるませんよ。この呪いは」

「ノア。これから説明しようとしてたんだ」

「そんなふうには見えませんでしたよ。
むしろ敵である勇者さん口説いていたふうにしが見えませんでした」

銀髪の美男子は淡々と言っている。が魔王を確実に責めている。
魔王はため息を吐いて

「俺がいつ口説いてた？」

「今さっきです。」

普通勇者に対して可愛いだの言う魔王は
見たことも聴いたこともありませんよ！」

「ノア。……いつから見ていた」

険しい顔の魔王は銀髪的美男子を見つめ。

その見つめられて当人は頬に指をあて最大級の笑みで、「『これが魔王』って言われていたところからですかね。その影から覗いてました」と輝いた目で答えていた。

「あれほど覗きは禁止って言ったじゃないか!!」

「だって魔王様可愛いだもん!!見守るくらい、いいじゃないですか」

「見守ってんじゃねえー!!」

座っていた真つ赤な椅子から立って魔王が怒鳴った。

「怒った顔も可愛いんだから」

「黙れ」

「……あのそろそろいいですか?」

「「あつ」」

その反応は……

忘れてましたよね?

完全忘れられてましたよね!!

僕は軽いため息を吐いて

「魔王。呪いの事聞きたい。何がなんだかサッパリだから」

魔王は「ああ」と頷き勇者を見つめて

「ある一行のやつらに見た目を子供にされたんだ」

藍色の瞳が悲しげに語っていた。

2話 実は…（後書き）

長く書くこうと心がけてるんですが…
短いすね（＾－＾；）

次はやっと理由を書けるので暴れられるはず

今度は勇者ツッコミ……予定ですw

3話 理由と誤解

静まり返った部屋。

大きなカーテンの隙間から月明かりが僅かだが差し込んで魔王を照らし、月明かりが悲しげな笑みを更に儚く見せる。

さつきまであんなに騒いでいたのに。

主に美男子と魔王だけど……

魔王が浮かべていた柔らかな笑みが苦笑に変わり

「ははぁ……これでも私は26なのに。もうこの姿は10年も変わらない」

「!?!」

だから見た目が子供。なるほどそうゆうわけかと納得した。
でも自分より9歳も上なのだ。なんか聞いていて悲しくなってきた。

「でも26って信じられない……」

「信じられなくても本当だ。私だってこんなの嘘だと思いたい」

魔王は片方の腕をもう片方で包え、

黒ローブの袖にシワがつくぐらいきつく摘んだ。

表情は相変わらず苦しそう。だがその表情は子供がするものとは思

えない、
大人がするものだきつと……

「でもこのままでも魔王様十分可愛いんですけどね」

「ノア!!」

この場の雰囲気を読まず、淡々という美男子さんあんた凄じよつと僕は別の意味で感心してしまう。

美男子さんを睨み付けてる魔王もたえない苦勞な事だと涙が出そう
だ。

「”魔王”は別に可愛いとか必要ないだろ!!」

「まあそうですが、でも可愛い方が私にとって目の保養ですし」

「目の保養!!男に使う言葉じゃないだろ!!」

ノアも男なんだから!!」

美男子さんはふふつと笑って魔王に近づき軽く頭を下げた。

「お言葉ですが、私は魔王様が大好きなので男とか女とか関係ありません」

すつと顔を上げて輝く笑顔で

「”魔王”に従っている訳ではなく”貴方様”だから使っているのですから」

「……そっそうか」

はいと頷く美男子さんは何だか嬉しそうに微笑んでいる。

なんか美男子さんが勝った感じ……

うーんつまらん。

魔王頑張ってくれと心の中で応援した。

「ところでちゃんと呪いをかけた相手を教えなくていいんですか？
魔王様」

「お前が言っな……」

呆れた声が響く。

なんの事かさっぱりですと言っような態度の美男子さんに魔王も頭を抱えているようだ。

恐るべし……

でも何だかんだ、この雰囲気になれてくつろぎはじめている僕も怖い。

だってこの魔王だし。ねえ。

「勇者……。話を戻そう」

ため息を吐き、魔王は座り直す。

「呪いをかけた相手は10年前の勇者一行だ」

「ちよつちよつ……へっ？

……今何て？勇者一行？」

真剣な顔で語られた事が頭を真っ白にさせた。

深緑の瞳が見開き、驚きを隠せなかった。

「勇者ちゃんと聞いてるか？」

魔王の声で我に返った。

危ない危ない。

気を取り直して答える。

「うん。大丈夫」

「……話を続けるぞ。」

勇者一行って言ってもその仲間の魔術師だ」

「えつでも魔王が勝ったんでしょ。なんで呪いなんか……」

疑問しか浮かんでこない。

魔王に挑んだ”勇者”はこれまで誰一人帰って来たものはいなかった。

そんな魔王が魔術師ごときに呪いなんてかかってしまっただろうか……

「そう急ぐな。確かに一戦交えて勝った。」

それでも私は殺さない主義だ。それに……」

「えっ！！横暴非道で血も涙もない魔界の王。”魔王”なんじゃないの!？」

驚きを隠せず思わず叫ぶ感じに言ってしまった。

魔王の言葉を遮って……

魔王は気にせず、淡々とめんどくさそうに話す。

「魔王が誰しもそうとは限らないだろう。
第一殺しはめんどくさい」

死体なんて真つ平ごめん何て言うように、眉にシワを寄せ首を振る。

「嘘だ!!」

思わず叫んでしまった。

だって益々信じられないから。

じゃ今までの魔王のイメージを覆すことになる。

でもそれは認められない。

いや認めたくないが正しいかも……。

でも魔王は真剣な眼差しで僕を見つめる。

「嘘じゃない」

「……」

それでも心の奥では思ってしまう。

だって実際に被害にあった所を数知れず見てきたのだ。

それも酷いものだった。

だからハイそうですかと素直に信じるわけがない。

僕は鞘に手をかける。何時でも剣を構えられるように。

魔王もその行動の意図に気が付いたのか、
更にシワを深く刻み勇者に歩み寄る。

「勇者。ちゃんと話を聞けまだ終わってない」

さっきまで可愛いと言っ言葉似合う彼だったのに、

今はその言葉より凛々しいがピッタリとはまる。
何より覇気を感じる。

子供でも魔王は”魔王”って事だと思い知らされた。

どんどん距離が詰められて行く。

思わず後ろに下がろうとしたが体が動かない。

あつ時の魔法か！！

見とれている場合ではなかった。

額に汗が浮かぶ。

「大丈夫。

何もしない。だからちゃんと聞け」

もう距離はないが身長差は否めない。

丁度腹に頭がくるし、上目遣いで話してくる。

凛々しいんだか可愛いんだかとにかく脳内はパニックだ！

「人間界に被害をもたらす奴らは反乱軍だ。

俺の考えがまず気に食わんらしい。

そしてこの呪いをかけた魔術師と勇者は生きている」

強い眼差しで語られ藍色の瞳が真実だと告げているような気にさせられた。

その強さは更に光を増す。

「勇者。お前が考えていることは偽りの魔王だ。

だから不安に思ってることも何も心配することはない」

真剣なピリツとした空気だったのに落ち着かせるような優しい雰囲気に変わった。

魔王は僕に抱きついてきて笑顔で。

「勇者契約しよう。この呪いを解いてくれた暁には守ることを約束しよう」

4話 名前

今は大変な状況になって戸惑っている勇者です。

「何故かって今……魔王に抱きつかれてますもんね」

そうそうって

人の心読むな！！

動けないままの悲痛な僕の叫び……

美男子さんがさっきまで黙ってたのに急に発言したよ。おい！

どうやら僕と魔王の会話を傍観者側に回っていたらしい。
というか絶対見て楽しんでるだろう。

その笑顔がム力つきます。

魔王は魔王で抱きついたままだし。

小柄で背伸びしてまでぎゅっとしてくる姿はなんか母性をくすぐられ って！！

いやいやいや ！！
待って僕。

そんな母性は求めてないぞ僕は！！

恥ずかしさで悶えるものの、

石のようにピクリとも動かないこの体がなんとも煩わしい。

だからと言って解くのも無理。何たって魔法は大苦手だから、簡単なものしかできない自分が憎い。

もつとちゃんとやるときゃよかった……。

「魔王様いつまでこうしてるつもりですか？」

流石に見かねたのか、魔王に話しかけた美男子さん。
いや多分見飽きたんだろう。

「えっ」

「何ですかその返事は！？アレですか！！抱き心地がいいからですか！？」

「はあっ！！！！お前なに言っつて」

「そうなんですネ！！なんて破廉恥な！！！！
そんな風に育てた覚えは有りませんよ！！」

ちよっつ！！美男子さん主旨変わってませんか？
この状況を助けてくれるんじゃないの！？

呆れながら美男子を見るが、确实からかっているようだ。
うん、哀れ……

魔王も流石に離れて、低めの声で美男子さんに言う。

「そんな風に言うのは誤解を生むからやめろ。
それにお前に育ててもらった覚えはない」

「いやいや!!」

何の誤解を生むと言うんですか」

さっきの育て件は無視ですか!?

寧ろ否定されてるのに気にしないってどんだけタフなんだよこの人は!!

魔王はふつと笑って

「だってこれ初級の魔法だよ。多少の魔法が使えればすぐ解けるのに」

「へえっ?」

美男子さんが明らかに変な声を出した。

勇者がまず魔法が苦手で誰も思わないだろうし。

えっじゃ……

この状況を招いてるのは僕の力不足のせいかな……。とりあえず、うる覚えの呪文を心の中で唱えてみる。自信はないけど……。

『 汝、時間の使者よ。

私の時間を元に戻せ契約のもと主が命じる。

タイム - t i m e - 』

スツと肩が軽くなった。

鞆にかけていた手を伸ばして解す。

「解けた」

意図も簡単に……

何やってたんだろ。

魔王は当然と言つよいな態度で美男子さんに言う。

「言つたとおりだろノア」

「ですね……」。

えつと勇者さんがバカだったですね」

哀れんだ目で言われた。

こんな事知つたこつちない。

僕は眉を寄せて呆れただろう彼を睨み。

「美男子さんには言われたくないです」

「まあいいですけど子供に言われても痛くも痒くもないですから」

屈指のない笑み。

やっぱり好きになれない。

いや、敵だから好きにならなくてもいいんだけど…

「ああ勇者さん。ノアと呼んでください。」

美男子さんと呼ぶのは恥ずかしいですからやめて下さいね」

「はあ？」

「ノアですよ。本名はノア・アークスですけど」

急に自己紹介されてしまった。

美男…じゃなかった。

ノアについては別に興味ないけど……。

関係なからう魔王までもぐいつと腕で引き寄せて

「因みに魔王様はカノン・D・ローシェン様ですよ」

「お前やめろって！！ベタベタひつくな。後勝手に自己紹介すんな
！！！」

ああ相当嫌がってますよ。

えっとカノン……

なんか見てる限りノアの方が魔王に見えてくる。

ああ性格的に迷惑なところが特にね。

ノアは構わず頬を膨らまし、

「だって今言わないでいつ言うんですか？」

「うつ……。でっでもそれは後でもいいだろ！？

それに詳しい説明もしなきゃいけないだ！

いいから離せ！！」

「……仕方ないですね」

必死に逃げようしてた魔王を渋々ノアは離れた。
魔王は素早くノアから距離を置く。

「はあ……。じゃ話を元に戻すぞ」

「うん」

乱れていた息を整えて

「魔術師にかけられたところまでだったよな」

「うん。生きてるところまでは聞いた」

「ああ。いつもは勇者一行を気絶まで追い込んで移動魔法で送るんだが……」

漆黒の長い髪を指でいじり始める。
どうやら話づらいようだ。

「……その。不覚にも魔法の詠唱中にかけられたんだ」

「はあ？」

「だからドジを踏んだだって」

魔王はさっきまで赤みが収まっていた頬がまた赤みを帯びていた。

「これを解けるのは勇者しかないんだ」

「確かにそうなんですよねー」

「ちよつと待って二人とも!!」

僕はそんなに魔法は得意じゃない。

寧ろ大の苦手なんだ！
第一に理由が解らない」

いきなりの事で頭がパニックになる。 って本日何度目だろう……

大きく首を横に振って無理無理と言っても、魔王は譲らず。
真剣に話す。

「お前しか解けないだ。
だから頼む」

「もう……。
なんで僕なんだよ……。
わかったよ！！

やればいいんですよ！！やれば！！
解いてみせようじゃないか！」

そんな強い眼差しで見つめられ続けられるほど、
僕の心は強くない。

仕方なく引き受けたが、確か抱かれたときに『勇者契約しよう。この呪いを解いた暁にはお前を守ろう』って言われたことも気になる。

覚悟を決めて。

「まだ名前言ってなかったよね。
僕はアンジュレッタ・ガーネット。

本名で呼ばれるのは好きじゃないからアッシュと呼んで」

手を魔王の前に差し出して

「解けるかどうか解らないけど……。
これからよろしく」

「ああ」

魔王は差し出された手を掴み。
強く握り返した。

5話 部屋

ノアは客室への案内人として勇者と共に来ていた。

廊下は薄暗いがそれほど暗くはなく、
落ち着いた内装をしていた。

初夏に入りはじめた季節にしては暑くはなく寧ろ、
ややひんやりとしていて心地よいくらい。

ノアが一室の前で足が止まる。

「ここが勇者の仮の部屋ですよ」

「ここ。えっ仮？」

ドアノブを回し開けるとノアはええと頷き。

「ここは客室なんで、ちゃんとした部屋が調うまではこちらでお過ごし下さいね」

ノアは微笑み、

勇者を部屋の中へ招かれる。

青ベースのシンプルな作り。

窓からは月明かりが差し込んでいる。

壁沿いに小さな化粧台がある。

向かい側にはちよつと大きめなベットが2台、

その間には小さな台にランタン（オイルランプ）が灯されている。

ここが魔王城の中だと言われないうちにもありそうな宿屋の一部屋だ。

「ノア。一つ聞いていい？」

勇者はこの部屋を見て1つの違和感に気付いた。

「何でしょう？」

の声が聞こえた。

ノアはドアを閉めて勇者の隣に立った。

「照明ってこのランタンだけ？」

「はい。そうなのですがどうしました？」

「もしかして……」

電気が通ってないと言わないよね？」

首を傾げ腕を組む。

サラッと銀髪が流れ輝く。

「……」 電気” って何でしょう？」

「……」

えっ？えっと……

聞き間違えかな？

いやいやまさかーと、心で否定した。

「だから”電気”だよ」

「ですから”電気”って何でしょうか？」

きよとんとした表情で言われてしまった。

「マジで！？だって”電気”だよ知らないはずなっ……！！」

はっとしてランタンを見てしまう。

柔らかな赤が部屋を優しく密かに照らしていた。

ノアは首を傾げたまま隣に立っている。

マジでなんだ！！

思わず膝をつきそうになる。

もうこうなったら膝について床を叩きたいくらいだ。

こっち（人間界）じゃ当たり前のように使ってるのに……！！
あり得ないだろ……！！

「電気知らないとか嘘だと言って……！！」

「はい。嘘ですよ」

「……はあ？」

えっ……えっえっ？

開いた口が塞がらない。
頭が真っ白になる。

うそ………嘘？

電気はあるってこと？

「……嘘って何が？」

「えっ電気ですよ」

クスクス笑い出すノアに対してついていけない僕。

「だっていきなり電気はあるかなんて聞くからビックリしましたよ」

「えっだってさっき……」

「誰も」知らない”とは言っていないじゃないですか」

面白そうだから首を傾げてみただけですよと僕を見つめたまま笑いながら言った。

僕は僕で呆氣にとられてポカンとしてしまう。

「ちょっと弄ってみたくなくてつい。いやぁー新鮮でした。
魔王様と同じで弄りがいがありますね」

……えっ？……

……ってことは……。

「『騙したのか！？』」

驚きのあまり叫んでしまった。
ノアは長い耳を手で押さえた。

余程煩かったのかな
まあ自業自得だと思う。

でもまだ笑ってますよ。
この嘘つきめ！！
眉にシワを寄せて、
ノアを見る。

「……勇者さん。顔が怖いですよ」

「もとからこんな顔です。もういいから帰って下さいよ」
ため息混じりに言うとノアもへの字に眉を曲げて

「分かりました」

一礼して背を向ける。があっと思い出したのかまた振り向き。

「そのクローゼットは好きに使って下さいね」

微笑み後は紳士のような態度で後を出ていた。
それまでが酷かったけどね……。

ノアも出っで行ったしとやっとくつろげる。上着を脱ぎ、聖剣も下ろす。

ラフな格好になってベッドにダイブした。

ポヨンとしてなかなかいい、すぐに睡魔に襲われそうになった。
が目に入ってきたクローゼットが気になった。

クローゼットはベッドの隣にある。

でもあのノアが素直に出ていたことがちよつと気になってたし、
去り際に”好きに使って”言っていたのだ。

「怪しいよな……」

重たい体を起こしてベッドから降りる。

恐る恐るクローゼットの前に立ち、
取っ手に手をかけて引く。

開かれて目にうつったのはただの服。
いや薄暗くて余り見えないけど……。

不意に手に取って見ると、フリルの付いた白いワンピース。

「っ!」

別の持ってみるが真つ赤なドレスや可愛いピンクのスカート

インナーまでもが薄ピンク、
タンクトップがあれど可愛い柄入りだし更にはミニスカまであ
るではないか!?

「どういうことだよ!」

愕然とした。

確かに僕は女だけど!今の僕は男で通っているし、第一に似合わ
ない。

とりあえず……

見かなったことにしよう。

そんでもって明日ノアに一発殴っておこう。

うん。それがいい。

自分に言い訳をして勇者は眠りについた。

6話 迷いと迷惑

ふわふわな感触

このまま寝てたい……

でも……

朝日の光が許してくれそうにない。

仕方なくムクツと頭を上げ、クチャクチャになった朱毛を手ぐしでとかしながら起き上がる。

キヨロキヨロ辺りを見渡した。

まだ覚醒してない頭が昨日の出来事を少しづつ思い出す。

(……夢だったらよかったのに……)

項垂れる。

「はぁあわわ〜」

ため息まじりの欠伸吐き出しながら、体をほぐしてベットから降りた。

向かう先は脱衣室。

クローゼットがある壁を挟んだが所がそこ。

軽く支度を整えて、

いざ問題のクローゼットへ。

ノアの変態的な思考な服からまともそうな服を探し出さないといけない。見れば見るほど使えなさそうな物ばかり……

（どうして民族服とか入ってるんだよ！！）

軽く怒りを覚えながら探す。

「たくっ」

あっ声もつい出しちゃうけど、
気にしない。気にしない。

数十分後

やっとクローゼットから見つけたのが白いワイシャツに、ベージュで七分丈のズボン。

これぐらいしかない。というかもう探す気力もないけどね……。

袖を通してみる。

サイズはピッタリ。だけど、ワイシャツはやっぱり透ける。
胸を隠すサラシが薄つらと見えるがまあ問題ないだろう。

変態がいなかぎりは。

さあノアを殴りに行くかと意気揚々と部屋を出ようとした。がドアの下に紙が挟まっていた。拾い上げて中を開く。細々と場所の名前

や図が載っていた。

「魔王城のマップばいなこれ」

きつとノアが挟んでいったんだろう。

親切なのか変な人なのかよくわからないやつだよなと苦笑がもれる。

気を取り戻して部屋を出た。

質素な造りの廊下。

魔王城というから派手な装飾をしているかと思っていたが違った。夜歩いていた時はノアに付いていくのに気が集中していたし、夜の暗闇で気をはらってなかったたので印象的だった。

とりあえず魔王の所に行かなきゃいけない気がする。

必然的にノアも居るだろうし。

先ほどの地図を片手に廊下を歩く。

さつきから同じところぐるぐる回ってる気がするけど気のせいだよかね。

自分の居場所がよく分からなくなってるなんてそんなこと。

……ありました。

确实、迷子ですね。

来たときはスムーズに魔王所に行けたのになあ……

今行けないってどういふことと内心ツツコミながら構わず歩き続け

る。

「君、迷子でしょ」

えっ自分以外に誰もいない筈なのに可愛らしい女性の声が聞こえた。

あたふたしてちよっと取り乱した。

ちよっとだけね。

後ろに微かな気配を感じ振り向くと、身長がやや高めの女性が立っていた。

ここにいてことは彼女も魔族なんだろう。綺麗な容姿が目立つ。

金色の髪が胸の高さまできて、後ろはポニーテールにして結いつている。

白い肌がより可憐そうに見えるが眉間にシワを寄せてイライラしているようだ。

「君、ここに何回来れば気が済むのよ」

「えっ？」

「だからここを通るの5回目。

滅多に迷う人いないわよ!!」

初対面の人にいきなりキレられた。

見た目と中身のギャップに驚かされる。が気になる一言があった。

「あの来る数えてたってことは見てたんですか？」

「当たり前でしょ。最初はたまたまた見かけたただけだけど。君何度も見かけるし」

苛ついた態度が急に柔らかくなって

「困ってんじゃないかと声をかけたのよ」

「あっありがとう」

「どう致しまして。」

で、何処に行きたいの？」

「えっと……魔王様の所」

「ああ逆よ逆。」

「ここは貴族様の客室エリアよ」

魔王様の部屋は真反対側のもうちよい上の階だわ」

彼女は僕が持っている地図に指で現在位置と魔王様の部屋を教えてくれた。

「ありがとう」

「えっいや、当然のことをしたまですよ。もう迷子にならないでね」

「気を付けます」

ペコリと頭を下げて礼をした。
早速教えてもらった道順に歩き始めた。

「ってちっ違う　！！
そっちの道じゃないわ！！」

シャウトされた。
いや叫ばれた。
あれ？違うのと僕は足を止めて振り返った。

彼女が走ってこっちに来る。
大した距離ではないからすぐに追いついて腕を掴まれた。

「！！！」

「君見てると心配だわ。
魔王様の所連れててあげる」

「えっでも悪いよ」

「あーもう！！
つべこべ言わずに付いてきなさい！！」

ぐいつと腕を引つ張られて連れていかれる。さっきと向かっていた方向とまるで逆……。

訂正、僕はどうやら方向音痴らしいです。

二人の足音がよく響いていた。

強く引つ張られていた腕はいつの間にか外され、今は並んで歩いている。

やっぱり僕が歩いていた道順は間違っていたのだろう。

見覚えのない通路に出た。

さっきとは違って薄暗いが怖くわない。

窓から木々が生い茂っているのがよくわかる。

まだまだ歩く。

他愛もない話をしながら歩いていたが、

「君、新人さんだね。道がわからないみたいだし」

「それでどうということ？」

「えっ違いの？見ない顔だし。名前まだ聞いてなかったわね」

「えっ……」

(どうしよう……)

正直、戸惑った。

本名で女子ってわかるからやっぱり……と迷っていると彼女は立ち止まり、笑って手を差し出された。

「私はレベッカよ」

「えっと……」

「アッシュです」

まだ戸惑いつつも、差し出された手に手を重ね握りしめる。

「そう。よろしくねアッシュ」

笑顔が花ように可憐で思わず、顔を赤らめてしまうほどの可愛さだ。

「うん。よろしくレベッカ」

にこにこ微笑み合うアッシュとレベッカ。

「アッシュ。一ついいかしら？」

「何？」

聞き返した瞬間に腕を引っ張られた反動を利用して抱き締められた。いや僕の方が若干背が高いけどって今そんなことはどうでもよくて！！

「れっレベッカー!!」

驚きを隠せないまま固まっているとレベツカは、背中に回していた手を外し僕の頬を両手で挟んだ。僕を真剣に見つめてる。

「あつあのレベツカさん？」

さつきから状況が理解出来ず、慌てていると真剣だった表情から笑みに変わり

「アツシュって男の子よね？」

「なっ何言って!？」

「なんか自信なくて。初めて会ったときに女の子に見えたから」

「そっそんなこれでも男の子ですって!!……ちよつまっひっ引っ張らないで!!」

否定した瞬間にワイシャツの裾を捲られた。腹チヲを一瞬許してしまったが、咄嗟に両手で裾を押さえうまく回避出来た。

本当、不意討ちは勘弁してほしい。

いや、不意討ちじゃなくても困るんだけど……。

「冗談よ。冗談」

レベツカは笑っていたがどうだか。
油断していると危ない気がする。
気を引き締めないと!!

「でも男なら安心だわ」

「えっ？」

「魔王様に悪い虫つかないでしょ。最近多いのよ言い寄ってくるやつが」

嫌々そうに話すレベッカ。余程魔王目当ての女子が嫌なのだろう。そもそも何故ここに魔王の話が……。僕、関係ないし。

レベッカはまだ嫌そうに話してるし。

「だってね！！あの可愛い見かけと大人の身ギャップが堪らないらしいわ。わたしもだけど」

「そうなんだ」

なんか最後可笑しなこと言っけなかつたかな……。とりあえず頷いとく。

「でもアツシユなら大丈夫よね」

レベッカは不機嫌からころっと笑顔に変わり僕の手を握りしめ

「えっえっ？何が？」

突然ふられて困惑する。

「魔王様を悪い虫から守ってあげてね」

『はあい!?!』

思わず声が裏返ってしまった。

レベルカは構わず、更に手に力を込めて

「あなたを今日から魔王様ファンクラブ推薦、魔王護様衛隊長に任命するわ」

「……」

びっくりすることが多すぎて言葉が出ない。

「よろしくね隊長さん。さあ魔王の所へ行きますか」

固まった僕を引っ張り歩き出すレベルカ……。

折角まともな人に出会えたと思ったのに。
うう泣きたくなった。

だけどこの先に更なる困った人たちに出会つとはこのときの僕は思いもしなかった。

7話 自覚…？

時間を遡って昨夜の事。

「本当にこれでよかったんでしょうか？」

ノアにため息を吐つかれた。

勇者を客室に送った後、仕事を書斎でしていた俺のもとにわざわざ来てこれだ。

あんまり信用はしていないのだろう。

ため息を吐きたいのはこつちだっていうのに。

「仕方ないだろう。」

リゼが言ってたんだから」

ノアには目を向けず黙々と机に向かい、ペンを走らせる。

「それはそうでしょうけど……」

あの”リゼ”ですよ。

五分五分な気がするんですよね」

ぐちぐちと煩いので見て見れば渋った顔でまだ言うか。
目を反らし、無視して書き続ける。

「別に勇者がどうと言う訳ではなく。

約10年近く溶けなかった呪いが早々に解けるのか疑問を感じる
のです」

「それは俺だって感じてる。でも信じるしかないだろあの男を。」

「ですが」

ノアは机に両手をドンツと付いた。

机が軽く揺れるし、書き途中の書類に彼の影のせいで被さる。

邪魔をしようと苛つきながら見上げてみれば、険しい表情の顔が間近に迫っていた。

「今までも大変だったじゃないですか！！お忘れですかあの事件を！！」

「……」

俺は手を止め、

ペンを机に置きノアを見据える。

「別に忘れたわけじゃない。

やつがどれだけ迷惑者か十分わかっているつもりだが」

「じゃ……」

「でも可能性がある。信じるしかないだ。

例え間違っていたとしてもなノア」

落ち着いた口調で言っただつもりだが、まだ納得したつもりはないの
だろうか……。

ついた手を退かさない。

「分かってくれ、これは俺の我が儘だ」

にらみ合いが続いていたが、ノアが目を閉じ机からゆっくり離れる。

「分かりました。

でも無茶だけはしないで下さいよ」

「ああ」

「はあー。もう魔王様の頑固ぶりは敵いませんよ」

ノアが苦笑した。つられて俺も口元が緩む。

「よく言う。お前も十分頑固だ」

「そうですかね」

「そうだ。一緒にいてよく思いしらされるぞ。まあ俺を止められるのもお前しかいないしな」

俺は言いきると、

さあ仕事仕事と言ってまたペンを持ち書類を書き始める。

ノアもそんな俺を納得したのかももう口出しはしてこなかった。

その後はノアも手伝いをしてくれ、

早急の仕事だったものは思いのほか早く終わった。

「やっと終わった」

机に倒れ込むと上から笑い声が聞こえた。
顔だけそちらに向けるとノアが笑っていた。

「そうやってると本当に子供見たいですね。夏休み終わった感じの」

「ノア」

「失礼致しました。カノン様」

笑顔から微笑みに変わりしかもこう言うときに名前で呼ぶなんて、
そついうのをずるいつて言うんだよね

じつーと見つめてもノアは微笑みを返すだけこつちの方が照れるし
……。

目を反らし立ち上がる。

落ち着かないし、らちがあかなそうだしね。

それに今日はもう遅いから自室に戻ろう。

「お休みですか。カノン様」

「ああ。少し片付けたらなノアはもう戻って休め明日も早いだろ」

「ですが」

「じゃ命令。早く寝ろ」

俺は机の書類やらなんやらまとめて片付け始める。

ノアは暫く見ていたものの、

渋々頷いて歩き出す。が、ドアノブに手をかけた時に

「でもリゼが関係なしにあの勇者さ……いえアンジュレッタさんは私的には好きですけどね」と言い残して書斎を去った。

ドアの閉まる音と同時に書類を落とした。慌てて床に散らばった紙を拾い集めるがノアの一言が頭からこびりついて離れない。

『私的には好きですけどね』

（それってどう言う意味だ！！）

頭の中がパニックになるし、今更ノアの所へ行くのも失礼だろう。もう夜中だし……。

「爆弾残しやがって」

顔を手で覆いながら呟いた。

散らばった書類は綺麗に整え、

机の上も綺麗に片付けた。が自室に戻らず、椅子に座り物思いにふけていた。

（もうあいつ何考えてるかわからない）

悩んでも答えがでないものにずっと悩んでいても、仕方ないのに思考がどうしてもいつてしまう。

どうして悩むのかも自分ではよくわかってない。

ノアが好きになったからか親友としてショックだったか。はたまたアンジュレッタが気になったのか。

考えても答えは出ないのに。

ただアンジュレッタの事を考えるとちよつとだけ胸が苦しくなる。
それはなんではよくわからないけど……。

わからないことだらけで頭が痛い。
こついうに誰か物知りな……あつ！！

（そうだ。こついう時こそ！！妹に聞こつ）

人間界も往き来している妹なら、こつ言う感情についても詳しいかも。

それに今日帰ってきたところだからちよつといいし。

解決の糸口を見つけたかもしれない。がこのことでちよつと気がはれた。

さつそく明日聞くことにして、とりあえず今は寝ることにしよう。

でもなんか……。

明日は明日で何かが起きそうな気がする。

平和でありますように……。
と祈って書斎を出た。

8話 起床

レベツカが足を止めて笑顔で振り向かれた勇者です。

そつそんな満面の笑みでこつち見るのやめてください。

いわゆるこつち見んな的な…

げんなりしながら、此処までつれて来られた事は言うまでもない。

だつていきなり『魔王』護衛隊長』に任命されて、

しかもここまで猛ダツシュだ……。

ありえんし！！ああ流石魔族。

（感心するよ……。本当に）

あつそうそう、今僕が目の前にしてるのは巨大なドア。

昨日、魔王に初対面した所のドアだけど

今じっくり見ると、洒落ていて彫刻などされている。

でもここまでの大きさは無意味だと思う。

と頭の中でツッコミをかましていると、

レベツカはずつと僕の腕掴んだままドアに手のひらを向けて、

「ここが魔王様の所よ。でも……」

「でも？」

「今の時間は自室で寝てるはずだから襲…起こしに行きましようか」

すごく輝いた笑顔で言われた……。

「えっちょっ！！今襲うつて言いかけたよね！！」

「さあLet's go！！」

「「って無視ですか！！！！」」

レベツカは片手を振り上げ意気揚々に歩き出す。
本当、パワフルですよ彼女と呆れながら。
掴まっていた腕にまた力強く引きずられていく。

広い廊下をひたすら進んでいく。
引きずられて体勢的にも辛くなってきた。

「レベツカ。もう自分で歩くから、だいじょ……」

「ここよ」

遮られた。

つてか着くの早！！

しかもまだ掴まれてるし！！

今がチャンスと腕を振るがビクともしない。恐るべし……。

そんな事はお構い無しにレベツカは、首元からネックレスらしい紐
を手繰り寄せてアクセサリーらしい物を僕に見せた。

「アッシュこれ何だと思っ?」

「えっ 鍵だよね」

「大正解」

見せてくれた鍵を首から外し目の前のドアの鍵穴に通す。
ピッタリと鍵穴にはまり、捻るとカチャと小さな音がした。
ドアノブに手をかけて押すと少し開いた。

「ふふ。開いたわ」

「えっちょっいいの」

「いいの。いいの。」

「こんな時間まで寝てる方が悪いんだから」

これまで掴んでいた腕をスルツと外し、
慎重にドアを開ける。レベツカは手引きしながら、部屋の中へ進んでいく。

そもそもなんで掴まれていたかは疑問だが、
やっと解放されてほっとする。が直ぐにその安息は絶たれた。

なぜなら……

『お兄さま!!! いい加減に起きなさい!!!』

瞬時にハイジャンプして寝台の膨らみに向かって一気に距離をつめた。

たぶん寝台で寝ているであろう魔王に股がる。で、あのセリフだ。

（どんな娘だよ!!）

内心苦笑だ。

たぶん僕の顔はひきつっていたに違いない。

掛け布団がもそもぞ動いてる。

いや、もがいてると言った方がいいかもしれない。

「っっ!!」

なんか声が聞こえる。うめき声みたいな……。

「お兄さま。いい加減に!!」

「重いわ!!」

あつ流石の魔王も切れたらしい。

レベッカが股がっていたのにはね除けて、ベッドの上に立つ。

どこにそんな力が小柄な体に有るのかと、疑ってしまいが目の前の状況に僕は呆然としてしまう。

「痛い!!お兄さま急に立たないでよ」

レベッカは勢いよく床に落ちていた。

腰を押さえて撫でている。

まだ眠そうな藍色の目が、無理に睨みをきかしてレベツカを見ていた。

髪も息も乱れて、寝起きが最悪といった感じに表情から伺える。

「レベツカ……。今何時だ？」

「えっ 6 時 3 0 分だけど」

「俺は夜中の 2 時に寝たんだぞ」

「そっそれがどうしたって言うのよ」

どうしたもこうしたもと魔王は呟いて、更に険しい顔つきに変わりベッドを降りた。

床には同じ睨みを効かせたレベツカが座っていたがヒョイツと簡単に捕まえられていた。

「お兄さま離してよ!!」

「……」

無言で対抗する魔王はお姫様抱っこをして、廊下に連れていきレベツカを放り出す。

（つて!!!!!! いいのか!!）

慌てて僕も扉に向かうが、魔王は小言を呟いて最後に『シールド』
つと言葉だけは聞こえた。

駆け寄った事だけあって聞こえた言葉だが、この言葉は魔法だよね

……。勇者に冷や汗が浮かぶ。

（待つてよってことは……。閉じ込められた！！）

魔王は僕のこと気にせずまたベットに入って行く……。

ドアからは抗議の騒音が聞こえるが、これもほんの少ししか聞かないから無意味だろう。

これも守られているおかげなのか……。

一樣、こっちからも開くかと試みたもののやはり魔法で無理だ。

仕方なく脱出を諦めて魔王のベット隣にイスがあつたので座った。

邪気ない寝顔ですやすやと寝ている。

このまま起きるまであとどのくらいかかるのかあ。

僕はしばらく眺めていた。

9話 自業自得ですか！？（前書き）

後半がちよい微えるかも…
でもすぐコメディに戻ります。

9話 自業自得ですか！？

漆黒の長い髪が枕にひろがり小さな呼吸音が聞こえる。

また眠りに入ったみたいだ。

僕が近くに座っても、気付かないくらいだから余程眠かったんだろう。

「……普通。起きるだろ。普通は」

愚痴ってみても、

起きる気配を見せない。

（魔王のくせになんて無防備な……）

こんな姿を勇者の目の前にさらしたら普通は消されるだろうな。

いくら約束でも、野蛮なやつだったら即あの世じゃ……。

それをやらない僕もどうなのかと頭を抱えた。

一定した呼吸音にこちらまで眠くなってくる。

いかん。いかん。と左右に首を降って眠気を飛ばすがこのままでは寝てしまいそうだ。

（まだ面白いものとか有れば起きてられるけど……）

辺りを見渡す。

白ベースのシンプルな部屋で、ベッドの近くにある机は紙束がどっさり置いてある。

後は小さなクローゼットとベランダが有るくらいで、

良く言えばシンプル。悪く言えば殺風景って感じが取れる。

別段楽しいそんなものなんてない。

強いて言うならこの変わり者の魔王だけだ。

『爆睡ですか！？』てツツコミを入りたいけどレベッカのような扱いをされるのは嫌だし……。

でもこう寝てられるとちよっかい出したくなるのも人間の性だよなあ。

魔王が起きるまでとじつくり観察を始めた。

まつ毛がクルツとして長い。

それでいて鼻はスーっとして高めで、白く透き通る肌してるしスベスベしてそう。

唇もぷっくりしていて柔らかそう。

そう、正に美少年……！

（……って何考えてんだ……！僕……。でも女として完敗だ……）

「はっ……いやいや、完敗とか勝負してないし……！第一にこいつは男だし……！」

思わず自らツツコミをかましてしまった。

魔王は起きる気配ゼロ……。

（騒がしかったでしょ……！なんで起きないの）

ベッドを叩くが、これも無反応。
自分が虚しくなるだけだった。

でも落ち込んでばかりでもダメだと僕が首を降って、

（えい！！こうなったら！！）

意気込みを新たに、次は触ってみよう！！

実はさつきからほっぺが気になって気になって仕方なかった。

だって、柔らかそうなほっぺたが目の前にあるのは誘惑以外に他ならないし、

やましいことなんてない、ない。

自分を正当化させて優しく触ってみる。

（うわー。スベスベだ！！）

ちょっとテイションが上がる。

まだ起きそうもない魔王に、調子に乗って髪を撫でてみるが髪もさらさらで柔らかい。

（なんだこいつ！！うっ羨ましい）

ちよつと嫉妬しつつも撫でる手を止めないでいたら、撫でていた手が小さな手と重なった。

「えっ！？」

魔王が起きたのかと思い急いで手を引いたが、それは出来なくて腕を引き込まれた。

突然の事で驚き、目をキュツと瞑ってしまった。
体が浮く感覚があった後に弾力性があるものに、落ちた感覚がちょっと怖く。

恐る恐る目を開けてみた。

目の前をちらつと様子を伺うと魔王の顔のアップ。
それに慌て顔が赤くなる。

（かつ可愛いつて今はそんなじゃなくって!!）

見とれてる場合じゃない。

自分が巻き込まれては、誰がこの状況を打破するだ!!
と意気込みんだが僕は抵抗を試みて、あることに気が付いた。
背中に手を回され抱き抱えられているような。

いわゆる抱き枕的ポジション……。

隙間ないし密着しているため行動も制限されてしまった。

（……どうしよう）

とりあえず抵抗をしようにも、この寝顔を見ると罪悪感が否めない。

ああ大変なことになっちゃったよと僕は頂垂れた。

こんなに困ってる僕をよそに幸せそうに寝てるな、おい!!

いつその頬をつねってやろうかと、自由な右手を動かして頬をむにと掴んだ。

意外に伸びる、伸びる。

まあ情けない顔になったところで離してあげた。

……本当、これだけ近いとどうしていいかわからない。
なんせ顔がドアップだし。

大人しくしとけばよかったと後悔をしていたりして……。

（起きそうもなかったから行動に出ただけど……失敗だったなあ）

はあ……とため息を一つ。

でも見た目（子供）に反して強い力で抱き込まれてるよな。
よくそんな力が出るもんだと感心するくらい。もしかして魔族は力強いのか？と考えたが魔王だからに落ち着いた。

さっきつねっていたところが多少赤みを帯びてきた。

（あつちよつと強かったかな）

八つ当たりでやってしまったような自覚はあるので、多少の後ろめたさはある。

自分でやつといてなんだけど痛みが和らぐように頬を撫でる。

すると一瞬、魔王が笑みを浮かた風に見えた。

（……まさか起きてる？）

でも一瞬のことだし、

「魔王？起きてます？」

問いかけてみたものの返事なし……。仕方なく撫で続けていた。
が唇が気になった。

あつ決して変な意味ではなく、形もいいし色も赤くて……
だから純粹に、

「羨ましいなあ」

眩きながら手で触れたら、触れていた唇が動き

「そんなに羨ましいの？」

驚いて距離を置こうとしたが、自分が抱き抱えられているのを忘れていて背中に力がかかる。

「危ないよ。急に動くと床に落ちる」

「なっ…だつて！？それよりいつから起きて！！」

慌てどよめいている僕を魔王は微笑んで更に引き寄せられた。魔王の胸に収まる感じに包み込まれた。

「ハッ離せ！！」

今まで、かつてないほど暴れてみたものの。全く効かないし、魔王が多少邪魔そうな感じだけ受け取れた。でもめげずに抵抗をしてみると耳元でため息と詠唱が、

（あっこれヤバイパターンですか！？）

強ばる僕に囁くように『チャーム（魅了）』と、魔法の耐久性も実力も弱い僕には跳ね返す力もなくあっという間にかかった。

「大人しく聞かないからいけないだぞ」

更にため息を一つ、聞こえた。

それとともにだんだんと体が熱く火照ってくる。

（何これ！？）

今までに感じたことのない感覚に戸惑いを覚え魔王の服を咄嗟に掴み耐える。

シワが付くほどの引っ張っている、それでもたまに耐えきれず声が漏れそになりなんとか飲み込む。だが熱は治まるどころか更に熱くなっていく。

「勇者？」

異変に気付いたのか魔王は僕の頬を両手で挟み上に向かせられる。が今は出来るだけ魔王に顔を見せたくない僕は反らするが、やはりそんなことは出来なく藍色の瞳と見つめ合う。

「大……じょうぶ……気にしないで……」

「全然大丈夫じゃないだろ！？」

「……あ……はあ……いいから……離して……」

強めに言い放ったが、さっきまで見ていた顔なのに、たんだん視界がぼやけて視点が定まらない。

頭の中の隅では、ずっと見ていたいの……と思ったり……。でももう何も考えられなくなっていた。もう火照る体が言うことをきかないから……。

すると魔王の指が僕の目尻をすつとなぞり。透明な何かを拭われた。

きつと涙だろうかあ少しだけ視界がはれ、困った顔の魔王が見える。

と思ったら、頬と頬が当たりそうなくらいまで近づいて耳に息を吹きかけられた。

「ひぁー！なっ……………なあにを！！……………」

息がかかった瞬間に電気が走ったかのような衝撃が体を走る。その様子を確かめてから魔王は離れて、

「勇者。まさか魔法の耐久性は全くないのか？」

「……………う…うん……………たぶん……………」

「……………そう言うことは早く言え。手遅れになるぞ」

「へっ？」

問われたことに頭がついていかず、ただアホぽい返事をしてしまった。

魔王は気にせず僕の額に触れて、また呪文を唱え始める。

僕の体が余程熱いのだろう。魔王の触れた手が冷たくて気持ちいい。そんなこと思いながら僕はただ腕の隙間から魔王を見ていた。

すっと手が離れると唱え終わっていた。

「解いたからもう大丈夫だ。……………勇者あれでも初級の魔法だぞ」

「…しっ……………知らないもん……………」

「だからあそこまで普通の人は効かないから」

顔を片手で包みながら眉を潜めながら言う。がクスって急に笑って

「俺を触りまくった罰だなこれは」

「!」

急に何を言い出すんだこの魔王はと起き上がろうとしたが、まだ体は言うことを利かず目だけで訴えたが……

「違っって顔してるけど俺の髪を撫でるときから意識は戻ってた」

「なら早くいえや!!」

あつ呂律は大分戻っていたみたい。
内心安心だが魔王は頬を膨らまし、

「だって触られただけなんて損じゃないか、だったら俺だって触り返したい!!」

「どんな理屈だ!!」

「それは勇者に言われたくないよ。君がはじめにしてきたんじゃないか!!」

「っう」

図星なために言い返せない。

（確かにそのとおり……だけど）

僕はキリツと睨み。

「でも寝たフリをするあんたもいけないだぞ！！それに君じゃなくてアツシュだ！！」

魔王は冷ややかな目で見下し、

「それで？」

「えっ？」

「寝ていただけがそんなに悪いのか？」

「えっと……。寝てると寝たフリとはわけが違って……だからもう嘘をついたのが悪い！！」

半ば叫びぎみに言い放つとクスって魔王は笑っていた。
冷や汗が背中を濡らす。

「でも俺は途中本気で寝ていたぞ。嘘じゃない。それに起こしたのは勇者だ」

「……」

優しい口調で言われたが目が笑ってない。

正直怖いですよ。

この魔王は……。

返事が返しづらくて無言になっちゃった僕も僕だけど。

すると魔王は急に僕の頭を撫でて、

「だから、その……。」

いくら朝だとしても男の部屋に1人でもう行くんじゃないよ」

「えっでも」

「返事は？」

「うう……はい」

無理やり頷かせた感が否めないけど。

どうやら心配して言ってくれたみたいだから素直に頷いとく。

よし、と魔王は満面の笑みで納得し撫でていた手が離れた。

魔王はベットからおり、くるりと勇者の方に回る。

僕も重い体を起こして少年にみえる魔王を見る。

「じゃ朝御飯にしようかアンジュレッタ」

「……」

一瞬、時間が僕の中で止まる。

「どうしたの？」

「その呼び方はやめて」

「可愛いのに。とうんじゃ、アンジェで」

「魔王……。人の話聞いてました？」

僕が問いかけても、笑顔でアンジェ、アンジェと言ってる。

（あーこれ……。無理パターンだよね）

僕は苦笑するしかなかった。

10話 どんちゃん騒ぎ

はいー！！呼ばれて飛び出てジャジャジャーンッ！！って呼ばれて
ねしいー！

一人ツツコミも結構辛いけどめげないよー。あーテイション高い僕
（勇者）です！！

もうテイション上げないとやってられないからさあ。
この惨劇を目にしたら……ね？

説明すると……。

パイ投げ大会始まってます。
って一言で片付けてしまったけど、そこらの壁がべっとべっとにク
リームが貼りついてもったいない。

どうせなら、食べれないパイ使ってくればいいのに飛んできたパ
イを軽々避ける。

僕は反射神経と体術はずば抜けていいからこんなの楽々だけど……。

あの一言がなければなあ。

事の発端はノアの一言。

やっと朝食を食べられると思ってたのにこれだ。

（勘弁してくれよ！！もう！！）

腹ペコな腹を抑えて、飛んでいくパイを見送りどうしてこうなった
かを思い出していた。

回想

魔王の寝室を後にし、案内された部屋は応接室みたいな部屋を小さくコンパクトにしたような空間だ。

すでに朝食の準備されており、小さな机の上にパンが山盛り積んであった。

あんパン、食パン、メロンパン、カレーパン、アップルパイ等……。もう色々な種類が揃っていたが見ただけで食べきれないのがわかる。

（いったい誰がこんなに食べるんだよ）

内心呆れていたら、魔王はすでに席についていた。机が小さいため席が隣か、向かいかのどっちかで。僕は一瞬迷ったけど魔王の向かいの席に座る。すると後ろからコンコンと軽い音がした。

「どうぞ」

魔王が返事をするのでドアの開く音がする。

振り向くとあの目立つ銀髪が視界にグツと入ってきた。ノアだ。軽く礼をした後、無駄のない動きで魔王の隣に立つ。

「あれ？魔王様まだ召し上がってなかったんですか。しっかり食べないと力出ませんよ」

表情を崩さず注意するノアに対し、魔王はノアを見上げ

「いや……。食べるがノア。お前これわざとだろ？」

「あつ……。もうバレましたね」

「あたりまえだろ！！」

ノアは口元に手を当てくすつと笑う。
どうやら耐えられなかったらしい。

「笑うな」

「失礼致しました。」

でも勇者さんが食べきるかもしれないよ」

「……………」

「っていやいや食べないって！！」

そして魔王なぜ黙る！！」

僕は慌てて立ち上がったところで二人の笑いが響く。
どうやら謀ったらしい……。

（何これ！！もの凄く恥ずかしいんだけど）

頬が熱くなるのを感じた。

それに自分の状況を思いだす。

立つときに勢いよく手を叩きつけた机からそつと手を戻し静かに席に座る。

（バカにしゃがって！）

腕を組み顔を背け、ムスツとふてくされる。

「アンジユ？」

僕に落ち着いた声がかかた。

「ちょっと悪戯がすぎたね。気にしてるの？
それならごめん。ほらノアも謝って」

「はぁ…。ドウモ、スイマセンデシタ」

「……」

魔王はまだましな方だけど、

ノアの一言に全然、誠意が伝わってこない。

第一にこれ謝ってないじゃとないと逆に呆れた。

「アンジユ？」

魔王の問いかけにちょっとだけで様子をチラッとだけ見る。

上目遣いで不安そうな表情にドキツとした。

なんか健気で、心が揺らぐ。大人げないなと思い直し、

「……もういいよ。食べよう」

体勢を変えずに答えた。

もしこのまま沈黙を続けていてもずっと上目遣いで見てこられそうだし……。

魔王の声のトーンも上がって、嬉しそうな声が耳に届く。

やっと食べられると思い僕は向かい直す。

魔王は既にロールパイなど皿の上に乗せ食べていた。

ノアははじめ微動だにしなかったが急に思い出したかのように魔王に尋ねた。

「あつ魔王様ちゃんと伝えました？勇者さんに」

「……何を？」

徐にバケットからアップルパイを手にした魔王が手を止めてノアの方に向く。

「契約の話ですよ。契約したとしてもかしたら国王に殺されるかもしれないってことですよ」

「ノア!!」

魔王は持っていたアップルパイをノアに投げる。がノアは軽く避ける。

「へっ？」

僕は僕で思わず、情けない声をあげてしまった。

バケットに積まれたパンに手を伸ばしていたが止まる。

だってありえない話だったから。

「それは契約の手前に話すつもりで、まだ言うつもりもなかったぞ

「!!」

「えーでも悪いことも知っておかないと」

「それってどういうこと？」

苦渋の顔した魔王に対しノアはシレッと「言っただまんですが」といい放った。

さらに僕は動揺した。

さっきまでの笑顔が嘘のように、冷たい空気に変わってちょっと怖い。

「ノア!!」

魔王はさらにパイをノアに向かって投げたが、ノアは最小の動きで避ける。

これを数十分続けて今に至っています。

でも『なんでだろう』と僕は問いたい。

だって、魔王が何故そこまで怒ってるのかわからない。

ただ隠していたことが、僕が契約するともしかしたら国王様に消されるかもって……。

そんな馬鹿げた話あると思わないもん。

これは笑いたくなる。

そんな二人は僕を置いてまだやっている。

「魔王様もつたいないですよ」

「煩い!!」

「そんなだから子供だと言われるんです!!
もう26歳なのだからしっかりしなさい!!」

「……分かってるさ。そのぐらい」

か細い声がすると魔王の振り上げる手が止めた。

「でも、せめて自分の口から伝えたかった」

苦虫を噛み潰したよいな顔で言う。

「……そうですね。申し訳ありません。
出過ぎたまねをしました」

ノアは深々と頭を下げた。

魔王は『もういい』と答えたノアはそこからゆっくりと顔を上げた。
が沈黙が部屋を満たす。誰一人喋ろうとしない。
僕は耐えれず、思い切って吹き出すように笑う。
もちろん作り笑いだけど。

「あはは。どうしてそんなに暗いのさ!
別に契約しても消されるはずないでしょ?」

「……いや、消される可能性が高いですよ。勇者さん」

ノアは静かに言う。

「なんで？」

「なんでってふつうに考えてもみて下さい。

あの人間の王様ですよ。あの分からず屋が素直にこちら側の話を聞くとは思えません」

「分からず屋？」

「はい、そうです。今までにも……って魔王様？」

言葉切ったのは魔王がノアの袖を引っ張ったから。
そして目で訴えてるのがなんとなく僕にも分かった。

「俺が話す」

「ああ、そうでしたね。お任せします」

ノアは微笑んで頷き一歩後ろに下がった。

魔王も頷き返しその後僕を見据えるが、表情はさつきより穏やかだ。
優しい口調で、

「まず、何から話そうか？」

この国の話、それとも人間の話、それともアンジェの仲間の話？」

どれでもいいよつと魔王が言ってくれたけど。

一番きになったのは僕の仲間……。

なぜここでテイオの話が！

と驚かずにはいられなかった。

11話 迷惑な……

これまで一緒に旅をしてきた仲間。
魔王討伐のため、共に戦うと誓い。後ろを守ってきてくれた。

ときに途中で出くわしたモンスターや魔族は必ず必死に逃げ、殺さずをもっと一緒に一緒に居てくれた仲間。

その彼とは魔王城に入ったとたん空間が歪み僕は吹き飛ばされて、
気がついたときには彼は居なく。

必死に探したけど見当たらなくて……。
僕たちは別々に別れてしまった。

もう後戻りも出来ず、不安を抱えながら進んで行くしかなかった。

（彼を……。

彼を知ってるってどういうこと……！）

僕は自分の手を強く握りしめ、手のひらが汗ばむ。

「どうして仲間のこと知ってるの？

途中で失踪したのに……」

「うーん。簡単に言うって保護した」

「……保護ってあの迷子とかのときに預かってくれる……あの施設？」

「そうそう。」

それに勇者以外は俺の所に来れないようになってるからな」

「えっそれってつまり……」

恐る恐る聞くと、魔王がニヤリと口元を歪めて、

「そうつまり、もう引き離されることは決定事項ってわけだ」

その不適な笑みと魔王の言葉に僕は啞然となった。がすぐに心から沸々と怒りが沸き上がった。

（卑怯だ！！）

思わずにはいられなくて怒鳴りそうになったがなんとか堪えた。

「それでも理由があるんだぞ。」

勇者と共に一行を生け捕るって言ったら言葉が悪いけど、生かして捕まえるためのだ」

「……殺さないの？」

「ああ。俺は殺しが好かん。って前にも言った気がするが。でも、村まで作って保護してるからティオもそこにいるぞ」

優しい声で魔王に言われた。

驚きと共に怒りが覚めていく。

でも一つ疑問があった。

（さっきの笑みは何だったんだろう？）

魔王はニヤリとまた笑って、

「ただの悪戯だ」

「えっ今……心よつ読んだの？それに悪戯って」

「顔に書いてあった。」

それに弄られるより、弄る方が面白いからな」

にこつて笑う魔王が可愛らしくて、思わずきゅんつときた。が、言葉の意味を考え、その思考を振り払った。

（もう引つ掛かったりしないぞ！！）

僕が意思を固めていたときに、

「でもアンジュにお願いがあるんだ。もちろん、契約の後でいい」

さつきとは裏腹に困り顔で問いかけてきた。僕はちよっと思いだたるものの、自信がないから知らないふりおして……。

「えっ何？」

「その……ティオを止めてほしい。今大変なことが村で起きてて……」

喋りづらいのかためらいっているようなあ。

しかも目を反らしがちに言っているけど……。

でも何か照れているようにも見える。

（気のせいかなあ）

僕が首を傾げたときに。

「テイオが……」

「テイオが？」

「女性を口説き回っていて被害というか、迷惑というか……」

「……………はあ……!!」

「もう出会った女性にかたばっしから声をかけてるらしくて」

「……………あの馬鹿は……!ここまで来てまだ口説くか……!」

耐えきれず、パンツと勢いよく叩きつけて怒^どってしまった。

一瞬だが魔王はビクツと肩を揺らした。がでもすぐ何事もなかったかのように僕を宥めるように微笑み。

「そんないきり立たなくても被害って言ってもそんな大きいもんじやない」

「でも……」

「契約が終わったらちゃんとノアが案内してもらっ」

大丈夫と魔王は笑って頷いた。ノアに向けてくるりと首を後ろに回し、

「頼む」

「かしこまりました」

ノアも了承していた。

「でもちよつとよろしいですか？」

「何だ？」

「実は勇者さんのお連れさんから伝言を預かってますので言うてもよろしいですか？」

ノアが一步前に出て魔王に並び、たいした事無さそうに言うつと魔王は振り返り。

「伝言？聞いてないが」

「はい。預かったのは今日の朝の事でその……言いそびれてしまいました。」

申し訳ありません」

ノアが魔王に詫びをあげていたが、僕は僕でティオの事が気が気じやなくて仕方なかった。

（いったいどうすれば1日で被害が多発すんだよ！！）

相方ながらに頭が痛くなる。
前から女たらしだとはわかってはいたけど。

自分がいなくてここまで荒れるとは思ってもみなかった。

「で、伝言は？」

魔王が聞くが。つい僕も

「そっそっだよ！！内容はどっなの？」

「そんな急かさないで下さい勇者さん。
ちゃんと預かってますから」

ごほんっと声を調べてから一枚の紙を取り出し、

『親愛なるアッシュへ

俺はどうやらはぐれてしまったらしい。面目ない。
方向と魔法だけが取り柄な俺なのにな（笑）

うんで、迷った俺に親切な兄さんに会った！！
ノアって言ったかなあ？

迷った俺を村に連れてってもらって、そのうちアッシュもくるって
聞いたけど。

でも俺…………。

恋の魔法にかかったみたい？

もう、出会った彼女達が可愛くて、可愛くて。

それに……すげえ！美人さんだから口説きに行ってきます！！
もしダメでも根性で当たってくるよ

だから、俺の恋路は邪魔しないで下さい。

アッシュはなにげにモテるんだから!!
本当邪魔しないでよね!

ティオより』

「はぁあ!!」

ノアが読み終わると、同時に僕は叫び声をあげてしまった。
だって!!これいつも通りのあいつなんだもん。
情けなさ過ぎて正直、涙が出そうになる。

一緒に討伐しようって言ってたのになんでこうも離れただけで目的
が違ってるんだろう?

僕はただただティオに飽きた。

魔王も伝言を聞いてから戸惑ってる様子で、

「えっとこれ……、本当に彼からなの?今までの魔術師の印象が違
うけど……」

「……間違いなくティオです。この女たらし加減と、この口調は…
…」

「あぁ。そうなの」

魔王は魔王で納得したような、飽きれているような……。
気持ちは十分に分かるので僕と魔王はお互いに苦笑を交わした。

(でもここまじゃいけないよ)

僕は気持ちを引き締めて、「でも、このままティオを放っておけな

い！！今から連れてくる」と言おうとしたのにノアに遮られ、

「その必要はありませんよ」

「どういうこと？」

「どういうことだ？」

驚いたのは僕だけじゃなく魔王もで、僕と声が重なった。

この驚き方からきつとこれも聞いてないんだと思うけど。

「実はもう捕まえてはいるので事実的には大丈夫ですよ。
まあ危険人物だったからの対処ですが」

「……………」

もともな対処でノアの仕事の手際さに感謝するよ。

ってか！！勇者一行の仲間が変態なのもどうなのかとも思うけど。
いやあ前から思ってたけど……。

魔王は驚いていたがすぐに表情を戻し、

「でも、これで契約の話は落ち着いて出来るなアンジュ」

「まあ確かに」

僕も頷いて見せた。

が、ノアは爽やかな笑顔で僕らに向け。

「こちらとしては焦りたいから早く契約進めてくださいね」

爽やかに見えてもどす黒オーラが見える気が……。

「わかってるよ」

魔王はへの字に口を曲げて答えていたが。

（何でも気付かないの！？）

この事に僕は軽く慌ていたが、でも口を開いたらまた余計な事を口走りしそうなので、口を固く閉じていた。

でも……。

思うんだ。僕は……。

（もうこんな城出ていきたい！！）

切に思う。

12話 契約

「とりあえず続きを話つ」

「そうだね。うん」

僕は大きく頷き。

テイオの話がまとまった所で、どうして僕が契約すると消されるのかという本題に入った。

「つまりは邪魔だからだ」

「なんで？」

「考えてみる。いくら契約書が本物でも王が信じるはずないし、且つお前：アンジエが裏切ったと思う可能性が高い」

「なんでそんな……」

契約書が本物ならどうして疑う必要が……！」

「あるんだよ。なんせ反乱軍も同じ……」

『魔族』なんだから」

魔王が言った一言で僕は固まってしまった。だつて契約書も魔王の意志も本気なのに、

王は同族だからと冷たい目線を送り且つ信用させずにただ邪魔で使えないと分かれば消すというのか……。

きつと今僕は、青ざめているに違いない。

聞いたときから血の気が引くような感覚に襲われ、頭の中では否定の言葉でいっぱいだった。”そんなはずないと”だが……

真剣に語る魔王に目が離せなかった。

だってこんな真剣な人が嘘をつき、人々の殺害や犯罪に加担していたらこんな眼差しはできないだろうと僕は息を吞んでただ魔王を見つめた。

（だってそんな……そんな事って……）

これが最初に浮かんだ言葉。
信じたいけど信じられない。

「信用出来ないなら、さっき言った”勇者村”に行ってみるといい。
きつとわかるから」

切なく笑いながら言う魔王に心が揺らぐ。
でも尚、魔王は言葉が続け、

「でも絶対約束する
アンジェ……いやアンジェレッタ。
俺は絶対君を守る」

口説き文句のような言葉に僕の体温は一気に上がった。

「なっ何を言っ……！」

思わず、片手で口を覆いたじろぐが魔王はそんな僕に気にも止めずただ強く、

「俺と契約して」

その真っ直ぐな瞳に捕まるまであと数秒だった。

しばらく、固まってしまった。

誰だってあんなことを、魔王に言われてしまえば目を見張るだろう。僕は伏せ目がちに頷いた。

「契約するよ。ただ条件がある」

「条件？」

「ああ。いいだろ一つくらい俺からも提示したって」

口元だけ笑って見せた。

今はどんな顔をしていいかなんてわからなかったから。

「いいよ。なんだ？」

「僕は死んだと王様に伝えろ。じゃなきゃ契約はできない」

魔王の濃い藍色の瞳が驚いたように見開く。
でもすぐに表情を戻し、

「わかった。条件を吞もう。でもいいのか？」

「ああ。いい」

契約してしまうのなら……

彼らのことを思うならばこうするしかない。。。

13話 求む

只今、青空教室ならぬ青空カラオケやらされている勇者です。

まだ勇者なはず！！ってあいまか！！

まーそれは置いて、なぜ青空カラオケかつて？

話せば長くな「さつきからごちゃごちゃうつさいわよアッシュー！！
歌うときは歌いなさいよ！！」

「なっ！！うつ…………はい…………」

…………実はまさかのレベツカに連れられて、勇者村に向かつてる最中です。

えっ話飛びすぎ？

それは僕も思うけど…………。

実は契約書にサインしたときに、レベツカが扉を足で蹴り破つてきた。しかも第一声が『どこ行ってたのよバカ兄！！』だ。

これは皆（って言っても三人しかいないけど）固まるよね。

流石のノアも固まってたから、これは相当お転婆と言っのか、パワフルと言っのか。

まあ苦笑ですよね。

その後珍しくキレたノアの形相といったからなかった。

魔王がパイ投げで壁を汚したのもイラついていたのも原因だけど、決めてはレベツカが壊したドアだ。

『このバカ兄妹！！』

ノアが一喝し、「魔王様はちゃんとして下さいもういい年でしょ！
！」とか、

「レベツカ様もいちいち物を壊さないで下さい！！女性なのだから
慎ましく淑やかに」とか、

「とにかく物に当たるのはやめてください。

これは貴方達のものではないのですよ！！」とか、
眉毛がつり上げて、長々とお説教をしていたのは言うまでもないけ
ど。

端から見ていた僕は、ちょっぴり面白かったけど。

なんせ、あの魔王やレベツカがしゅんつと縮こまって素直に頷いて
いたから。

だから反省しているのかなと思っただけどまさか！？

レベツカが僕の腕を引っ張り、部屋から連れ去られるなんて思っ
てなくてただただ驚いて、

（だってレベツカが探してたの魔王の方だし！！なんで僕！？）

笑いたきゃ笑え的な精神で今こうしてレベツカについて行ってるし
だいです。

でも少しだけありがたかった気がしないでもない。

回想

小さな机を精一杯身を乗り出してあんな風に誰かに求められることなんてこれまでなかった。

”勇者”だから称えられ頼られてはあったが僕自身を見てくれる人なんてテイオが育ての親と兄弟たちくらいだったから。

他は全て可哀想な人達だったから……。

だから心底驚いた。

ここまで強く、誰かに求められたのは初めてで正直戸惑った。

”勇者”ではなく”アンジュレッタ”として……。

魔王だから当たり前だけどそれでもとても嬉しかった。

（普通勇者にお願いしたりしないしね）

つい緩み笑顔になりそうな顔をなんとか引き締めて契約交わした。今でも思い出す、あの強い眼差しにキュンと胸が疼く。

これも初めてだから何が原因か謎だけど、でも分かることが一つ。

あのまま彼処にいたのでは、いつか表情が表に出てしまいそうだったから。

（ちょっとだけ。レベッカに感謝かな……）

僕はクスツと微笑み隣で陽気に歌っているレベッカの横を歩く。

勇者村に着くまであと少しの事。

14話 掃除と喧嘩

今小部屋で、小さな試練が出されていた。

呪いにかけられた子供の姿は決して背は高くはなく一般的な高さだ。しかし自分がノアに向けて投げたパイは壁にしっかり付いており、いつの間にか残骸が床に落ちている。

壁や床は一樣ノアの魔法で守られているから汚れてないといえは汚れてないのだが、油物を拭き取らないとシミになってしまうので掃除しなければならない。

俺は長い髪は束ねて後ろに結い、三角巾をかぶり汚れてもいい服となぜがレースがあしらわれたエプロンをつけた。もう強制的につけさせられたんだけど……。

後ろで笑ってるノアを一発殴りたい衝動に駆られるが堪えて。

片手に雑巾を持って今、背で必死に伸ばして、上の壁に付いた油を拭き取ろうと限界まで振り上げるが届きそうで届かない。

常につま先だちしているから、よろつきながらなんとか落とすが……。

(……何やってんだろう)

情けなくて笑えてくる。

側にいる見張りは俺に休む隙を与えず、作業を見守られてるし。

「なあノア……」

「なんですか？魔王様」

「何で俺だけこの部屋の掃除なの？」

振り向かずに問いかけると、ノアの空気が更に重くなったようで怖くて振り向けない。

「当たり前です。汚した張本人でしょ」

「うう……。返す言葉もございません」

「……分ければいいです。それにあとでレベルカ様にもドア直してやってもらいますから」

だからちゃんと掃除してくださいよと釘を刺された。

いつもながらに淡々とした口調だったけど、ちよつとだけイラツときたいや、さつきからこいつにイラついてるけど。

（わかるわかるけど……。原因お前のせいじゃなかったか！）

言いたい発言をまた堪え、それに言われたからには手を休めず動かして汚れを取る。

やっぱり身長低いのは不便に感じる。

はあっとため息を吐き、ずっと伸ばしている腕が疲れてきた。

（……くそっ！！届かない）

もうがむしゃらに掃除してやろうかと更に手を伸ばすが、つま先立ちした足がぶるぶると震えるだけで届かない。

必死にやっているとすつと影が隣にきてこつと音がした。音のした方を向くとイスが置いてあり、

「もう、届かないならこれ使って下さいよ」

「あ…ありがとう」

まさかのノアの手伝いに思わず見つめてしまう。

ノアは三角巾に触れて、前にずれていたのだろうか、後ろに引っぱり、

「魔王様……私そこまで鬼畜じゃないですよ。でもちゃんとダメなことは学んでいただかないとそれに26歳なんだからそろそろ落ち着いて下さい」

「いつ痛い所ついてくるね」

「側近ですから」

爽やかに笑われて、つられて笑うが俺の方は苦笑だ。

（やっぱり小さい頃から一緒に居るだけあるよなあ）

感心していると「さっ早く掃除して下さい！それでも魔力消費してるの私なんですから」言われて素直にイスに上り、壁の汚れを落としました。

「そつえば勇者さんに何か伝え忘れてません？」

「えっ……なんだっけ？」

「とても大事なことだったと思うですけど……」

「『あ！…！』」

魔王城を出て森の道、まだまだ歩き続けている。

さすがに青空カラオケは終わって、他愛も無い会話をしていたレベツカと僕。

あと10分くらいで着くらしい。

のどかな風景にんだかさっきの出来事が嘘のように落ち着きを取り戻していた。

「アツシュって絶対嘘つかない？」

「どうしたの急に」

「私、嫌いなよね。嘘が」

「えっ」

握り拳を作りながらだつてっとう嘘は相手を騙す事なのいいと思う！！っとレベツカに熱弁されてしまった。

さっきまで穏やかだった瞳がギラギラと闘志を燃やすような瞳に変わり、しまいには僕の肩を捕まれて揺さぶるられて同意を求められた。

「れっレベルッか!!おっ落ち着…こっ」

「だからアッシュはどうなのよ!!」

（完全！！無視ですかレベツカー！！うっつかつ勘弁して……）

流石にここまで揺さぶられると気持ち悪くもなってきたときに空から何か降りてくるのが見えた。

凄い速さで……こっちに何か落ちてくるって表現が正しいかも。うん？こっちに……？

アッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「レベツカ！」

危機を察した僕は大声を呼びかけ、肩を突き飛ばした。「えっ……！」と声が聞こえ、バランスを崩れたのがわかった。が僕の肩を掴んでいたレベツカは僕を巻き込み、押し倒すような形に倒れてしまった。咄嗟にレベツカの頭を地面すれすれで支えるように左手で受け止めたけど、はつきり言って今の状況はかなり気まずい。

「だつ大丈夫？」

レベツカの安否を気遣うものの、今の状況では確實怒られるのは目に見えていた。

今僕の左手は地面に付きレベルの頭を支え、乗り上がらないように避けて倒れた反面に顔が5cm以内という何とも間近で……。

端正な顔立ちも、綺麗な藍色の瞳も魔王とそっくりでドキリとしてしまう。

（流石兄妹だ）

妙に納得していると、

「大丈夫わけ……ないでしょ!! とういうことよ!!」

叫び声で耳がやられそうになった。

キーンと耳鳴りがするほど。

「おっ 落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか!!」

やっぱりレベツカの怒りゲージが上がったと同時に”ズドン”と大きな音があがる。

「何、今の!？」

音がした方向を二人して見るとそこはさっきまで僕らが立っていた場所に小動物が入りそうなくらいの穴が出来ており地面は深く抉^{えぐ}れていた。

「……もしかして助けてくれた？」

「うん。……ごめん。咄^{はげ}嗟^さだったから」

「そう。こちらこそごめんね。怒鳴^{なみ}ったりして」

「いいよ。それよりレベツカに怪我がなくてよかった」

自然に笑みが綻んだ。

レベツカの目が一瞬見開いたような気がしたがすぐに顔を背けられ、ほんのり赤くなっていたのは気のせいか……。

「それよりそろそろ離れてくれない？アツシュ」

レベツカに言われて今の状態を思い出してパツと起き上がって離れた。

「じつごめん」

「いいわよ！もう謝らないですよ。気にしてないから」

レベツカも起き上がって苦笑して言ってくれた。

そのとき『……………のよ！』とどっから声がした。

「今変な声が聞こえなかった？」

「ええ。聞こえたわ」

レベツカが頷き二人は辺りを見回すが特に変わりはなく、のどかな風景のまま。

「変ね…………？」

不思議に思つて暫くそのまま警戒していると『まったく間違えたのよ！！もう痛いじゃないのよ。ずれないでほしかったのよ。』『とエコーがかかった声の方を見るとさつき挟れて出来たであろう穴から青い何かが顔を出し地面の端を掴むと、更に青いのがまた出て

『よいしょつと』掛け声のような声がする。

最後にひよっこり出てきた頭でわかった。なんと鳥だ。鳥が這い上がりながらグチグチ文句を言っている！！
啞然とした僕とは違いレベツカは鳥を見据え。

「あんだだつたのね。トリオ」

地面に足をつけた鳥は軽く羽根についたであろう土を叩き落としてから、くるり首を曲げ。

「トリオじゃないのよ！！レベツカ様ちゃんとオルセーって名前があるのよ！！」

いかにも不機嫌な声で答える鳥がレベツカを睨み、レベツカも負け時と睨み返す。

「あんななんかトリオで十分。でなんであんな加速して落ちてくんのよ！！」

もしあれに当たったら私たち死んでたわ！！」

「あら？大丈夫ですよ。レベツカ様頑丈だから大丈夫なのよ」

「なんですって！！！！！！！！！！この鳥男！」

「聞き捨てならないのよ！！漢字だからって私の名前じゃないのよ！！」

「ストップ」

僕が声を張り上げて叫ぶと、一人と一羽が一瞬時が止まったかのよう
うに言い争いが止んだが逆に二人から睨まれ、

「アツシュ！！邪魔すんじゃないわよ」

「そうよ！！これは私とレベツカ様の戦いのよ！！」

「でっでも」

「でもも、それもないの！！黙らしゃい（なのよ）！！」

息もぴつたりと怒鳴られ、また言い争いがはじまりた。

僕はため息を吐いてただ呆れた。

（仲が良いのか、悪いのか……）

やめてほしくて怒鳴ってもこれでは前に進まないし第一にめんど
くさい。

争いは嫌いだし、見るのも起こすのも嫌だ……。

それでも暫く収まるのを待っていたが、一向に終わるようすがな
い。

（もう……いい！！使ってやる）

目を瞑り、『大気よ水と成れ。彼の者を溺れさせよ 水の牢獄』
と二人に向けて詠唱を発動させた。

すると一瞬のうちに空気が水の系に変わり、それがいくつも折り重
なって一本の大きな紐のような水の塊に変わった。

それは直ぐ様足元から一気に頭まで覆い尽くす。
それは一瞬の事で叫ぶ事など出来ぬほど早く彼女等を襲ったのだ。

（これで大人しくなってくればいいんだけど）

数分後

「……じょっ……冗談じゃ……ない……わ」

「……まっ……まったく……その……通りなのよ……」

ぐったりしている一人と一羽。

流石にやりすぎたかなって思ったけど、魔法が苦手な僕はそんな加減の操作なんて出来るはずも無く。

こんな風になっちゃって申し訳ない気持ちがかみ上げ、

「ごめんなさい。でも喧嘩はやめてほしいから……」

「……わかったわ。もうやらないから」

「本当？」

「本当よ」

レベル力は笑顔で頭を撫でてくれた。

鳥も『もついいなのよ。今回のことは水に流すのよ』と近寄つてまるで慰めているようだ。

和やかな空気が流れたあとレベツカが思い出したように、

「そういえばオルセーなんであんたが此処にいるの？」

「あつすっかり忘れてたのよ！魔王様に言付け頂いてるのよ！朱色の毛の子につて」

「えっ！？」

魔王からつと僕とレベツカは驚き、二人顔を見合わせてまた鳥を見てしまった。

どんなことを言付かって来たのか……。
なんとなく不安が募った。

15話 伝言と告白

爽やかな風がざわつと木々を揺らし、素肌を通り抜けていく。
そんな中立ち往生している勇者です。

魔王から伝言をもらっているという鳥……オルセーって言ったかな？
ついさっきまで一緒にいたというのに、わざわざ使いを出させるな
んて余程重要な事を言い忘れたのか……。

(…………めんどくせえー)

この魔王なんか言い忘れ多い気がするのは気のせいか……。

「で、言付けって何よ？」

痺れを切らしたレベツカが問う。

「……レベツカ様には聞かれないようにとも言いつているから教
えるのは……その無理なのよ」

「何よそれ！！失礼しちゃうわお兄様たら」

「まあまあ」

苦笑が混じりつつ、落ち着いて貰おうと言ったのに「笑うな」と怒
鳴られるし……。
どうしたもんか。

それでもレベツカはちゃんと魔王の言い付けを守るのか。

ちよつと離れた場所まで歩いていて木に寄りかかりこちらを睨みを
気かせている……。

「とりあえず本題に入るのよ」

「うん」

オルセーが仕切り直し、僕も改めて頷く。

「魔王様からの伝言はレベツカ様に身分の事は伏せ、後の事は全部
話せとの事なのよ」

……っへ？

今明らかに変な顔になっているだろう僕は、オルセーの言葉に頭が
ついていかない。

「つまりね、あのレベツカ様が嘘が嫌いのよ。
それはもう嘘ついた奴はボロボロになるくらい打ちのめされたの
よ。」

だからあんたも嘘を付かないように気を付けなさいなのよ」

まさかの手が出る発言……！

笑えない、笑えないよ。

（ええもう付いちゃってますよ……！

男って言っちゃったもの……！）

驚きのカミングアウトに僕の口元がひきつる。
そんな人だったとは……。

ただのお節介な女の子だと思ってたのに……！

それに心配までされてしまった……。
ちよいショック。

……………つか！！何回目だよって突っ込みたいくらいに驚くこと多いけど。。。

「あんたちゃんと聞いてる？なのよ」

怪訝そうに聞かれたので慌てて答えたものの目が絶対疑ってる。

「きつ聞こえてるって！！でも全部ってそんな……言えるわけないよ！？」

「身分以外はなのよ。何をそんな驚いてるのよ。男のくせにしかつりしなさいなのよ！」

飽きれ口調で言われ、渴も入れられた……。
しかも僕は女で……って隠してるから当然バレてないだけなんだけど。

人生で鳥に渴を入れられるなんて……そうそうないよな。
うん。やっぱ鳥だし。

「なんかバカにしてるでしょあんたなのよ」

青い綺麗な翼で指されて言われた。
明らかに疑われてる。

「えっ何「肯定よ肯定なのよ」

「ちっ 違っ」

「何が違っっていうのよ。そんなに違っなら普通すぐ答えるのよ！」

……しっ……してやつたり顔された！！

なんか逆にからかわれてる気がするよ。

といか絶対……！！

「あんだ。顔でモロバレなのよ。だから見え見えなのよ」

「見え見えって！！それに僕はバカにしてないし」

「してた！！これ断定たのよ」

このあからさまな言い方に、僕の中で苛立ちがプチッと音をたてて崩れる。

作り笑顔でそつと手を伸ばせばオルセーは「何なのよ」と言いながらそれほど警戒心もなくなただ睨むだけ。

この隙をみて一気に鳥の頬掴む。

オルセーの驚く声上がる。

うん甲高い声が……。

正直ちよつとうるさいくらい。

そして首を激しく振って掴んだ手を振り払おうとするが、僕の手は決して離さないようにしつかりと掴み外さない。

やがて鳥の動きが止まり、荒い息が聞こえる。

「はあ……はあっはんひのよ！！あんだ！！」

（はあ……はあなにすんのよ！！あんだ！！）

「ナニモシテナイデスケド」

「しへるしへる！！ひいからはやくはひゃしはさいはのよ！！
（してるしてる！！いいから早く離しなさいなのよ！！）」

オルセーが翼で僕の手を挟み込み力で外そうと試みているみたいだけど、まったく効果無くただくすぐったいだけだ。まあ当たり前だけど。

「もう余計な事を喋らないなら離すよ。鳥さん」

「ひっひつれいなのよ！」

「……」

僕はただ冷たい目で応対する。

オルセーがビクツと体をゆらし、

「はっはんた！はんのふくらいひなさいなのよ
（あっあんた！反応くらいしなさいなのよ）」

「……」

言葉に返すのも面倒なのでさらにキツく睨みつけると、
オルセーは更に身震いをして

「いやー！はひ、もうしゃへりません
（いやー！はい、もうしゃべりません）」

裏返った声で叫ぶ。

よっぽど堪えたみたいだ。

強く掴んでいた頬を軽くすると、さっと逃げて距離を置く。

（以外に弱い……？）

掴まれていた頬を擦り軽く涙が浮かんでいるようだ。

「別にそこまでは言っていないけど。で、話は終わり？」

「まだ……まだなのよ」

「えーまだあるの!？」

つい口が滑った。が仕方ないと思う。

本当に多いだもん!! もう。

軽く頭をかきながら改めて聞く。

「で、何？」

「……じゃ言うわなのよ」

怯えていた姿からずっと変わり、パッチリした愛らしい目が此方に向く。

また喉の調子を整え、

『今夜の夜部屋に来てくれ、あっこれは他言無用だから』

「はあ!？」

さっきの伝言の声とは違い、まるで魔王が喋っているような声。

つまり本気の声だろう……。

って今まで手抜き??

それはそれでム力つくけど、今はそんな事を考えている場合ではない。……。

またなのか!!

何度目のお呼びだし……。

つか!!魔王は私の母親か!!

あつこれ、叫んでもいいですかね。

寧ろ叫ばせてくれえ!!

それぐらい注文多いなとうんざりし始めていた。

「……また顔に出てるなのよ。それは気をつけた方がいいなのよ」

「あついけない」

オルセーに言われて、さつと顔を両手で挟む。

いくななんでも緩み過ぎだろう。

それに頭の中で『今夜の夜部屋に来てくれ』がリピートされてる。

うん、行きたくないからね。

面倒くさいのでお断りしたいけど仕方ない付き合つか。

「まあそう言うことだからあんたも頑張んなさいなのよ。じゃ私はこれでなのよ」

オルセーは急に言い出すと翼を広げ飛び立とうとしていた。

「っちょっちょっ」と!!

僕の声は虚しく飛び立ってしまった。

「本当伝言だけ……はぁーレベッカにどう話せばいいんだよ」

「私に何を話すのよ？」

驚いて身を擦ると、すぐ後ろにレベッカがいった。

（レベッカ戻ってくるの早すぎ……）

半ば焦りながら、冷や汗が背中を這う。

「それはその……。えっと」

「はつきりしないのね」

レベッカは低音で、はつきりしない僕に吐き捨てるように言う。

「いや、言う……ちゃんと……」

一度腹を決めた事。

いや、決めさせられた事だけ。

このまま、ずるずる引きずるよりずっとましだろう。僕は覚悟を決め重い口を開いた。

「……つまり、アッシュはニッケネームで本名はアンジュレッタ。お兄様の呪いを解く協力者で今いるわけね？」

「はい。そのとおりです」

思い切り視線が痛い。流石、美人の睨みはドスが効く……。

「……っで女の子なの？」

眉を器用に方眉だけ上げ、藍色の瞳がギラリと覗き。それはまるで鋭く突き刺すかのように眼差しを僕に向ける。怯みそうになるがそこは堪えて、まっすぐにレベッカと向き合い。

「……私は真正銘女です。嘘付いててごめんなさい」

「それはもういいわ。それより……」

急にガッシッと両肩を掴まれて、背中を木に押し付けられると

「お兄様の事をどう思ってるの？」

「へえ？」

「だからお兄様の事よ！！」

突然に魔王の名が出てきょんとしてしまふ。
何故？魔王の名前がこの状況で出てくるのだろうか。

必死に考えても魔王と勇者の関係だし、本来は敵同士なのだ。
素直に変な魔王ですと答えるべきか悩んだが、それはレベッカにも失礼に当たる。

だから考え直して、言葉を絞り出す。

「……うーん、ちょっと強引で天然そうだけど憎めないかな」

「……そうなの。って私は人柄を聞いてんじゃないわよ！！好きかどうかよー！」

レベッカの発言に目を見開いて驚く。

『好きかどうか』ってまさかのそっち！？

出会ってまだ1日……24時間も経ってない。

ましてすぐ、好きになるなんて一目惚れぐらいしか考えられないじゃないか。

第一に僕は魔王にホの字にもなってはいない。

「別に何とも思っていないけど……」

「えっじゃ恋愛対象外って事よね？」

「そうだよ」

「そう！よかった」

レベッカの険しい表情が一気に明るくなり、まるで花が咲いたように可愛らしい笑顔がこちらを向く。

「えっ何が？どうしたの？」

掴まれていた肩は外され、変わりに両手をぎゅっと握りしめられ、

「もうアツシュが悪い虫かと疑ってしまったわ。ごめんなさいね」

「えっうん、大丈夫」

僕も笑って返す。

もう怒ってないのかレベツカもにこにこしている。

レベツカがなんでそんなに拘こたわっていたか謎だが、誤解が溶けただけでも良ししよう。

「でも、アツシュ」

「何？」

「嘘ついたから罰に何かやってもらっわ」

「!？」

輝く笑みで言われたことにただ驚いて、

「ちょっと罰って何!？」

「そうね」

これ迄の笑顔とは違い、なんか企みを含む笑顔に変わった気がする。

「アツシュの正装が見たいわ」

輝く瞳がこちらを向く。

「…………男物で？」

何となく分かったが、あえて気付かないふりをしてみた。
だって着たくないだもん。

女物の服なんか……。そう願っていたのに、

「違うわよ！！女の子の正装よ」

やっぱり、きたー！！

「いや、それは無理！！絶対無理！！」

必死になって無理と伝えるが、レベツカは逆に楽しそうに『駄目』
の一点張り。

言葉の最後にハートが付くくらい甘い声で言うし！！

「ほっ他にしよう」

「嫌よ」

「何で！？」

「何でてそれは

そんなに嫌がるからよ」

誰もがうつとりするような笑顔で言われたら……

「って！！そこかよ！！」

思い切り突っ込みをかました。

こう言われたって普通は頷かないと思いいし。

「うんそうよ。でも命令だから着なさいね」

レベツカもレベツカで全く引かず。

黙秘で構えようとしたが、レベツカの目に着るよと訴えるように訴えかけられ、

「……着ます」

もう頷くしかなかった。あははと笑うしかない。

「さあ行くわよ」

レベツカにぐいっと腕を掴まれてまた歩き出す。

16話 テイオ

「待つてや!!」

「ぎゃあー!!!!!!!!」

来ないでえええー!!!!!!!!……ぐいふう……」

目が合った瞬間から逃げられたので思わずやっちゃった勇者です
もちろん殴った相手はテイオくん。

僕を見るなり、猛ダッシュで逃げだすんだもん。
失礼極まりないよね。

更に僕を苛立たせた原因はテイオを引き取りにいったときの案内
された部屋。

保護されてるときいたのにも関わらず!!
優雅に紅茶飲んでやがるし、片手には女性の手を添えてはにかんだ
笑顔。

もうサブイボです。

耐えられなくて『テイオ』て叫んだら。

案の定逃げられ反射的に追いかけた。

普通は体力的にテイオが逃げ切るはずだけど、僕の怒りが思わぬ力
が徐々に距離の差が縮まり手が届きそうなところできた。

そこで思い切り、首を猫のように掴んで強烈なパンチをお見舞いし
てあげましたけどね。

綺麗に入ったパンチの反動で地面に倒れ見事完全に伸びている。

「いいの?こんな事して」

終始見ていたレベツカは不安そう戸惑っているようだ。

「いいの。いいの。いつものことだから」

僕は笑って誤魔化す。レベツカはティオを心配して言ってくれた事だが本当にいつもの事だ。

毎回毎回、この女たらしは！！立ち寄る村や街にいるお姉さま方に次々と声をかけ、”お姉さん俺と遊ばない？”など言ってナンパをしているし。

たまにだがセクハラ行為を働く事もある。

正義の味方が、こんな犯罪者でいいのか……いや、確実に良くないけど。

まあ失神程度だから心配する必要もないだろう。

「でもアツシュ。さっきの言い方だとこの人知り合いなの？」

「うん。出来るなら赤の他人って言いたいけど……。説明するなら腐れ縁かな。小さい頃からの付き合いなんで」

「小さい頃から？」

「そう小さい頃からだよ」

笑いながら返すと、

レベツカは交互に僕とのティオを見て、

「……大変ね」

「うん。本当どうにかしてほしい。出来る事なら根性叩き直してほ

しい」

苦笑が漏れる。

変態で、女たらしだが魔法の腕はピカイチだから仕方ない。
王がティオを見込んでいるのだから。

変態なのね！！

大事な事だから2回言った。

「それにしても綺麗な顔立ちね」

レベツカは屈んでティオの顔を覗く。

確かにティオの顔立ちは綺麗なものだ。

手入れがいい薄い茶色い髪は短髪で、端整な目鼻立ちだ。

今睨で閉じているが淡い緑の瞳が隠れている。

そう普通にしていればティオだってかっこいい部類に入るはずだ。
まあ残念なところがあるから女性に逃げるわけで……。

折角モテ要素があるのに勿体ない話だ。

「でもどうするの？これ」

「どうしようか。そこまで考えてなかった」

僕は腕を組んで考えていると、レベツカは待ちきれなかったのかティオの顔を叩き始めていた。

「あの……レベツカさん。何やってるの」

「えっ起きないかなっと思って」

笑顔で言われても。

まあ僕が本気で殴ったからそうそう起きないと思うけど。

「そいつ危険だから寧ろ近寄らない方が……」

「そうなの？凶暴とか」

「そいつ女た「きゃー」

「レベツカ!!」

叫びとともになんかバキツだか鈍い音も聞こえた。
ティオを見るとまた殴られたようで両頬が赤くなっていた。

（片方は僕のせいだけど……）

「あつ!!ごめんなさい。殴るつもりはなかったのに」

「何されたの？」

「えっ急に腕掴まれて驚いてつい」

えへつと笑って誤魔化しても怖いけど。まあティオも悪から仕方ないよね。

「仕方ないよねってひどいよアツシュ」

「げっ読まないでよって起きてたの？」

瀕死の状態にでも陥ったかと思ったのに、怖いくらいにタフだこいつ。

「それにこの子のはアッシュの鉄拳より数十倍いい!! 寧ろナイス」

「いいんかい!!」

「うわっ……」

一様突っ込みをいれとくけど親指をたてて、満面の笑みを浮かべているやつにきくとは思えない。

僕はまあ慣れてるからはいはいのだけど、さすがのレベルカも引いている様子だ。

恐るべしティオ!!

「そこのお嬢さん」

「ナツナニよ」

「僕とデートしない？」

「はあ!？」

こっ………こいつバカだ!!!!!!

バカと言っしかない。アで始まってホで終わってもいい。この状況で誘うか普通!!

しかもレベルカ……。堪忍袋の限界なんじゃ

「ねえアッシュ。もう一回殴っても彼構わないかしら」

「あっうん。大丈夫だと思う」

案の定切れた様子。

黒いオーラ見えます。見えてますよレベッカ!!

僕は僕で苦笑いしながら言ったけど、自業自得だね。

「へっ? なっ殴る?」

テイオ緊張感ないし。おどけた顔してるけどこれからの裁きを想像すると身震いする。

頑張って!!

その後テイオの叫び声が響いたのは言うまでもない。

17話 呼び出し

時刻は夜。

嫌がるティオを無理やり引き取って魔王城まで連れてきたはいいが……。

ギスギスとした目線に僕は苦しめられていた。

「確かに俺はここに来るように言ったが……」

眉間にしわを寄せながらギラリとティオを睨む魔王。

今までのにこやかな態度と違い嫌いオーラが漂っている。

「こいつも連れてこいとは言ってないぞ」

「あーそんな事か。しかたなかったんだ。こいつを放って置くのは危険なんだから」

「なあ！！そんな言い方酷いぞアツ」黙れ変態」

チャッチャ入れられたので軽く一発殴っておく。

軽くぶっ飛んだけど、気にしちゃいけない。まあ流石にこれには魔王も驚いせて目をぱちくりさせていたが、僕は気にせず何事もなかったかのように振る舞い。

「大丈夫だよ。基本的弱いから」

「えっいいのか？その前にそう言う問題じゃない気がするが」

ぶっ飛ばしが効いたのか。

さつきまでも敵意は何処へいったやら、拳動っている魔王に僕は親指を上げ。

「大丈夫！大丈夫！」

へらへらと笑って答えると小さな声で「ひっ酷い」など聞こえてきたが面倒なので無視。

「それに一樣僕の仲間だし顔くらいは見せておいた方がいいかと思つてね」

「まあ確かに」

魔王もこくりと頷くと、

「魔王様はただ勇者さんと二人きりになりかったですよね」

「そうそ……！！……ってなんでお前がここにいるだ」

銀色が輝く美形さんが魔王の隣に立っていた。

「それは貴方がそこにいるからですよ」

「いつ意味分からんし！！それに嵌^はめんな！！」

「うふふ。照れちゃって可愛いです」

口元を押さえて笑うノア。

顔が真っ赤にながら反抗する魔王は可愛い。

確かに弄りたくなる。ちよつとノアに混じって僕もやりたいぐらい

だ。が後ろからボソツと聞き取れない音がすして首を回すと、僕の隣に頬を紅色に染めたティオが立っていた。

「美しい……」

「……はあ！???」

僕は自分の耳に入った単語が信じられなくて咄嗟に口から出った。わりと大きい声だったにもかかわらず、まだ討論している二人には聞こえていなかったようだ……。

（でも何故美しい！？）

怪訝そうにティオを見てみれば、うつとりした目で胸位置に手を組ある人を見つめていた。

ティオの目線の先には満面の笑みのノア。

まるで乙女のように見守る姿にサムイボが走る。

僕は見てられなくて顔を背ければ、隣にいたはずの気配がなくなっていた。

不思議に辺りを見渡せば前をの方でノアの右手を取り片膝をついて見上げているティオとそれに少々驚いているノア、呆気にとられた魔王という妙な絵図。

（なんだこれ！！）

叫びたい衝動をなんとか押さえてどう切り出そうかもたついていたら、

「君はなんて美しいだ」

「はあ」

「銀色の髪、その白い肌、そしてそのキリッとした目、そんな困った表情でもなんて可愛らしい」

「……どうも」

どんどんキザなセリフを吐いていくティオに良く言えば淡々、悪く言えば冷たくあしらって見えるよいな態度で耐用している。流石としか言いようがない。

感心していると袖を引っ張られた感覚。

僕はそちらに視線を落とせば、人差し指を口許に寄せて”しー”と声を出すと言うサインと上目遣いの魔王がいた。

(っ！！！めっちゃかわいい　！！！！)

可愛さのあまりに悶えているとさっきより強い力で引っ張られ、

「今のうちに出よ」

小声で言われたがそんな言葉に僕は構ってる余裕が無く、口元を手で覆って照れ隠しするのが精一杯だった。

「気付かれないようにそっと出るぞ」

「……うん」

惚けていたから反応が遅れたが、大きく頷いた。

魔王も笑って頷き返し僕の片手を取られる。

そっと後退りしながらも魔王は誘導して、物音をたてないようにゆ

つくりと確実に目的の場所に向かった。

まだノアはティオに捕まってるみたいで、でも何故か満面の笑みで話している。

（怖い！！）

恐怖を感じながらも、見事静かに部屋から出ることができた。

小さな手が力強く、温かい。

あの部屋を出てからも手をぎゅっと握られて進んでいく。

何処かへ向かっているらしい。

無言なために暗い廊下に僕たちの足音が響く。

でも嫌な沈黙ではなくちよつと気恥ずかしいような、照れ臭いようなそんな感じ。

暫くすると一つの扉の前で止まった。

この部屋は見覚えがあった。朝来たことがある確か……魔王の寝室だ気がする。

さっきのは書斎の部屋からは大分距離があるからここなら大丈夫と考えたのだろう。

魔王はなんか口ずさむとドアノブを掴み扉が開いた。

「どうぞ」

「どうも」

軽く会釈して入ると、予想どおり魔王の寝室で「楽にしているから」と言われたからベッドの脇にある椅子に座った。

魔王はベッドに腰かけて不適な笑みを浮かべたと思ったら、

「さて、邪魔がいなくなったからゆつくり話せるね」

「へっ？」

「今日は帰さないから」

「えっちょっ!？」

子供には似合わない言葉で攻められて僕は慌ててしまったが、隣からぷつと吹く音が聞こえ。

「嘘だ、嘘」

「!?!」

相手はその様子が余程面白かったのかまだ笑っている。

（くつくやしいゝ!?!でもこのままじゃダメだ）

思い返して、自分は大人大人と暗示をかけて

「で、魔王本題に入ろう。なんで僕を呼び出したの？」

「ああ話したい事があつてだな」

「……何？」

「どうやったら元に戻れると思う?」

……はっ 思考回路が軽く停止してしまったよ。

まさか本当の議題の呼び出しか!?

としかツッコミようしかつなかった。

この魔王なんとかしてください。

18話 赤髪

月が空の中心で真ん丸に輝いていた頃。

初夏のためそんなに熱くなくどちらかと言えば涼しい夜だ。
だが僕は不機嫌だった。

それが消して夏のはじめで暑いからとかじゃなく、
理不尽な質問のせいでイライラとした黒い感情が心を支配するからだ。

だって解決策を早々に思い付く奴がいたら僕はそいつを神だと思う。

凡人の僕（勇者ですが）にそうそう思い付くはずもなく、
ただ懸念な目線を魔王に送りながら僕は睨んだ。

「いくら待っても出てきませんよー!!」

「……だが」

「だがもしかもあるか!!コンニャロー!!」

「アンジュ落ち着け」

まあまあと落ち着きを払った魔王が僕を宥める。
その余裕が些か氣にくわない。

これを言ってもきつと魔王には通じそうもないから前に乗り出して
いた体勢は戻す。

ただ不貞腐れなが聞くが。

「……で？」

「いやまだ話してなかったから思い当たるかなと」

「そう言うこと？悪いけどまだ全然考えてないし」

言われたことをひねくれて返す。

そんな態度な僕に苦笑で頷く魔王。

わかってるなら呼び出さなきゃいいのに。

「で他には無いわけ呼び出した理由は？」

「あるには有るが……」

今まで余裕な表情が少しだけ曇って見えた。

というか明らかに口ごもった気がする。

（怪しい……）

僕は訝しげに魔王を見つめ。

この際、意地でも聞き出そうと僕は強気に言い急かすと、

「何。その気になる言い方は！！はつきりくつきり白黒つける！！」

「そうそう。こう言うことは直ぐに答える方がいいよカノン」

綺麗なテノールの声が頭上から聞こえた。

（今、二人しかない筈なのに！！）

僕は咄嗟に上を向くと燃えるように赤い髪と瞳の持ち主がにこにこ

と僕に向けて微笑んでいる。

「……………!?!」

要るはずのない人物が僕の後ろに立っていた事実には驚き過ぎて椅子から落ちそうになった。

そこを赤髪の青年が肩を抑えてくれたおかげで落ちなかったけど。

「おっと。気をつけて」

「どうどうもありがとうございます」

青年の輝く笑顔が眩しくて、見ていたこっちが何故か気恥ずかしくなり俯いてお礼を言う。

「どうも致しまして」

彼の声がした。

きっと見上げたら誰もがうつとりしそうな笑顔で言ってるのだ。

輝く笑顔っていう言葉がきくと似合うからだからある意味で遠慮したい。

無意味に輝いている奴は僕として苦手だから。

だがいつまで経っても抱えられたまま。

身動きを取ろうとしてもがっちり挟まれて動くこともままならない。

「あの一。そろそろ離し…」

「あのじゃなくてリゼって呼んで」

「へ？」

きつとアホ面になってしまったらう僕は思わず奇声をあげてしまったとき、

「そろそろいいかな？リゼ」

声をした方を向くと神々しい笑顔の魔王。

でも声はなんだか震えていたような気がしたが。

「アンジュを離してあげて、じゃないと話が進まないだろ？」

「うふふ。わかりましたよ」

茶化すりぜに魔王はなんだか…
目が笑ってない気がする。

（なんか二人……怖っ！）

内心冷や汗を流し二人を交互に見ていたら、捕まられていた力が弱まり青年に体勢を整えられた。

「これいいでしょう？カノン」

「まあうん」

「ダメダメ。そんな返事じゃ魔王らしくないもん！たまにはちゃんと僕の事叱ってくれなきゃさーそれにこれもわざとなの気付いてたでしょ？」

「あの……？どういうこと」

話の糸が見えないのでつい、言ってしまった僕。

魔王とリゼはお互いに見合っ^てリゼがプツと吹き出し。

口もと抑えながら僕に近づいて

「それはねアンジュレッタさん実は……」

「リゼ！！」

叫んだと思ったときに魔王はリゼの上着の裾を掴んで必死に言うなと目線で訴えていたがリゼはお構いなく、

「僕がおふざけしてただけですよ。ただカノンくんが焦れた^たかつたんでね」

「焦れたい？何が？」

聞き返した僕にリゼはそつと耳元でまで近づいて「それは時が教えてくれるでしょう」と囁かれた。

19話 実は変態

まるで予言者のように言ってきた囁かれた言葉。

リゼが言った”時が教えてくれる”ってそんな未来が見えるような言い方……。

（（（胡散臭っ！！！！）））

私は占いやら迷信やら信じてない。まして未来を言われても信じるわけがない。

自然と眉間に皺がよる。

「そんなに睨まなくてもアンジュちゃん」

「……別に睨んでませんよ」

「じゃここに皺を寄せなくてもいいんじゃない？」

おどけた笑顔で僕の眉間に指でつつく。

咄嗟に触れられた眉間を隠すように手をかざして、

「眉間に皺を寄せようと寄せなかつと僕の勝つてでしょうよ！！」

ぷいっと頬を膨らませて言い放つたらリゼは一瞬きょとんとしたがすぐ表情を元に戻し、

「だってカノン…… すねちゃった」

「…… お前のせいだろ。 つうか！！ そういうときだけ俺に振るな」

呆れた声で魔王が言った。

まあ僕もほとと困っていたけどね。

でもリゼは気にせずというか貴公子的みたいな感じに微笑んでる。

「だって可愛いからついね」

「えっ」

この人アホだろうか？

今の僕を見て可愛いか？ どう見ても今の僕の格好は男そのものだ。

多少童顔なのはしかたないけど可愛いとか求めてないし、

きっと頭のネジがはずれている可愛そうな大人なんだろうと哀れんだ。

「あの一。 アンジュちゃん。 その目線痛いけど何かなあ？」

「別に」

こんな痛い大人は本当はほっときたかったが仕方ない。

ここから追い出すわけにもいかないし、 第一に魔王も冷たい目線を送っているのに気がつかないのか……。

哀れりぜ。

そんな哀れんだ空気が占める中、 まったく鈍感なりぜに対して魔王が嫌そうに口を開いた。

「ところでなぜリゼお前がここにいるんだ？」

ごもつともな質問。

僕も気になっていたことだ。だってこの部屋さっき魔王が呪文を言
って開けたのだ。

入れるはずがない。

例外があるのか、レベツカは開けてたけど。

「ああそれね〜やってないよ。出来なかったが正しけどね」

にこやかに答えたりゼに対して魔王はぴくつと眉をひそませ、

「それはどういうことだ？」

「やだな〜。覚えてないの朝のこと」

「朝？」

「正確にはアンジュちゃんが出て行った後の話なんだけどね」

リゼは魔王のベットに座つてくすくす笑っている。

魔王はさっぱりだと言わんばかりに首を傾げてる。

でもリゼは魔王が思い出すまで返答を待っているようだった。

僕が出てったあとしていつの話だ。

腕を組んで考えても出てこない。

「アンジュちゃんはわからないと思うな〜」

「なんで？」

「だって魔王が着替えてるときに入っただよ」

「あっ確かにそうだ」

「へへ。着替えてるって……変態!!」

僕はさっと指を指して言うと、リゼは手を広げて、H A H A H A っ
と笑い声が部屋を響かせる。

「変態ってひどいなあ。僕はれっきとした男の子だよそんな魔王を
狙おうなんてそんなこと」

「じゃなんでそのとき入ったの」

「チャンスが無かったからねえ。でもごちでした」

「やっぱ変態だ!!」

僕は絶叫をして思わず近くいた魔王を抱きかかえリゼから遠ざかる。

「魔王。こんな変態に近づいちゃ駄目だ!!」

「……アンジュが言うことじゃないと思うが」

「そうそう。本人が言ってるんだから良いじゃない別に」

「『良くない!!』」

すごい剣幕で言ってしまったがこんな可愛い子が変態に狙われるの

は少々というか、かなりと言うか許せない。
すると、抱えられてた魔王がアンジュの顔を小さな手で叩いて、

「大丈夫。この変態はみんな慣れてるから下ろしてくれる?」

「そうそう。ってひどいなあ」

「酷くない。この研究変態占い師が!!」

つと抱きかかえていたので表情はよく分からないがなんか魔王もすごい形相だったのかなあ。

さすがのリゼも引いていたよ。でも笑顔で絶えてみた所をみるとやっぱある意味強豪なのかなあ。

うん、変態だけ。

大事かどうかわからないけど二回言つとく。それにしても気になる単語もあつたなあ。

なんて考えていたら、リゼが手を上げて。

「で話に戻るけどいい?」

「「どうぞ」」

うんうんと僕は頷いて話の修正に入った。

「あの部屋の前でアンジュちゃん待ってたでしょ」

「確かに朝ごはんの為に待ってたけど何?」

「実は目の前を通り過ぎてたんだよね」

彼の言っている意味がさっぱりわかりません。

ふふつと笑う笑みがなんだか気味が悪いし。

僕が嫌そうに見つめてやれば、鈍感なのかメンタルが強いのかいまいち謎だが。

リゼは得意そうに立ち上がって、何処に隠していたかわからない小瓶を取り出した目の前に差し出した。

「実はこれさ」

「興味ない」

「どうでもいい」

これと言って興味の欠片もなかったから一刀両断する僕ら。

「ちょっと聞いてくれてもいいじゃない!」

「リゼ。俺が知りたいのはなぜお前がここにいるのかであって、どんな方法で入ったかじゃないだが」

「でも」

「……」

「カノン!」

「……」

なんとまあ無言攻撃ですな。
ある意味辛いかも。

地味に……。

リゼは涙ぐんでいるぽい。

効いてるのかな？

意外にメンタル弱かったなと思いつつ。

その美しい容姿に、黙って見てる分だけなら本当に美人なのに勿体ないなとも思わせた。魔王も呆れて、

「じゃ簡潔に答えろよ」

リゼは一回こくりつと頷いて。

「魔王の部屋に入って出来たての新作を見せたらキレて閉じ込められた」

「……」

「……」

「あの……カノン？アンジュちゃん？」

決して行為で無言だった訳じゃない。

呆れてものも言えない。とことわざがあるように固まってしまったからだ。

というか……。

この人変態は変態だけど……。

アホっ子の割合が高いだなぁって実感した僕でした。

20話 喧嘩勃発

「ここに閉じ込められた話はいい。俺も悪かったと思うし……」

「カノン!!」

「だから抱きつくのはやめろ!!」

はい!!勇者ことアッシュ（アンジユ）です。

今、状況を説明します!!

今にも泣きそうだったリゼを魔王が見かねて、僕に「慰めてくるから離してもらえないか?」とお願いされたけどもちろん僕は魔王を離すわけがなかった。

だって変態だもん。どんな危害がって考えただけで……なんかうだつたことは目に見えてるし。

でも魔王は僕の腕からすり抜けてリゼをなだ宥めたいんだ。

友情心だったんだろうなあ。

でもそうして今の状況になったわけですよ。

まあ魔王がいい人だから仕方ないねえ。

それにしてもこうしている二人をみるとリゼは大人に見えない。

まだ魔王の方が上に見える。

見た目逆だけど実際は26歳の男が男に抱きついてるだよなあ。

魔王の本来の姿を見たこと無いからないも言えないけどさ。

（それはそれで見たくない……。というかレベッカに殺されるんじゃないか普通に?）

などと脳裏によぎる。

「というか本来は止めなきゃいけないのかい??」

「何チャラ隊長だから。。。って名前すらもう覚えてないし。」

「絶対行ったら巻き込まれそうだから行きたくない。」

「あの空間とても近寄りがたいです。」

「だって……」

「魔王の顔が凄く嫌そうで。」

「リゼはとても嬉しそうだけど。」

「いい加減にしろよ」

「いや、離さない!!」

「魔王はリゼの額を必死に押して引き離そうとしてるけど無意味ぽい。子供ですもんねー。不用意には近づけないからせめて助け船でも出してやろつかあ。」

「ああなんて僕は親切だろうって馬鹿みたいなことを考えながら、」

「あのさ。なんか魔王話そうとしてなかった?」

「ああ!!あるが今それどころじゃ」

「魔法使えばいいじゃない」

「ああゝ!確かに」

「ぱつと笑顔に変わった所をみるとどうやら考えがなかったみたい。って最強の魔王がこんなんでもいいのか。」

「本当会ったときからイメージ像を壊してくれるよ本当。マジで。」

「げんなりしながら見守ると、いつの間にか魔王はリゼから離れてい

てその後どからとまなく檻がリゼの頭上から降ってきた。
たぶん時間の魔法と物理的なに قادろうが……………。

なんか魔王もすっきりした顔してるし。

まあリゼウザかったですもんね。

檻の向こうがちょっとうるさいけど気にしない。気にしない。

まあ魔王が可愛いからもうなんでもいいや。

なんかどうでもよくなってきたし。

この1日を通せば誰だって思うはず。

「で話なんだな。とても言いづらいかとなんだが……………」

「なにさ」

「……………実はこの同盟を進めてきたのがリゼなんだ」

妙な沈黙が流れる。

今魔王がなんて言ったかな……………。

なんか僕の耳可笑しくなった気がするし、あつもしかしたら聞き間違えかもしれないからともう一度尋ねることにした。

「あのもう一度言ってもえないか？そのよく理解できなくて」

「そうだよな……………。信じがたいことだが、リゼに同盟を結べと言われたのは事実だ。だから契約を頼んだんだ」

「あの……………。この人偉いの？」

思わず指で指してしまった。

だって全然頭よく見えないし、寧ろバカっぽそうだし。美形だけども。

魔王もあぐねいて、

「偉いと言っか……。」

「言っか？」

「役職は……化学者兼占い師なんだあと認めたくないけど側近」

失せ目がちに答える魔王。

僕はにこり笑ってそうかと頷いたがやっぱり叫ばすにはいられず。

「やっぱアホだろ！！と言っか役職真逆じゃねの！！」

「えー！立派な化学占い師だよな」

「うん。両立させてるよね」

魔王は動じずにリゼに聞くわ、リゼは檻の中からグッドサインを出した答えわでイライラする。

「何意気投合してんのよ！！！！リゼはもつと立派な職業に就きなさいよ」

「えっじゃ占い師？」

「普通科学の方でしょ！！つかなんでここ魔界なのに科学なんて研究してんのよ！？魔法使えばいいじゃない！！」

行き絶え絶えながらもツツコミを入れると、リゼは頭をかいて、

「そんないっぺんに言われてもね」

魔王と目を合わせてお互いに“ねー”と頷き合っている。
なんですか！？一氣に仲良し度上がったのわ……。

僕、本当疲れるんですけど。

「だってね。そもそも俺に魔力なんてないし、魔法使えないのに力
ノン守れるわけじゃないじゃん」

「はあ！???」

「だから研究して物理的に攻撃できるように日々頑張ってるんだよ。
これでも」

まるでえっへんつというばかりに胸を張ってる。馬鹿丸出した。
なんか話を聞いていると頭が痛くなってきた。

僕は頭を抱えながら一様気になったことだけを聞いてみた。

「ちょっと待って……。魔力ないってどういうこと」

「えっ俺魔力なしだけどなあ！カノン」

「ああ。間違えなくゼロだ」

「ちょっと待ってよ！！それで側近なわけ！？強くないのに！！」

思わず、荒げた。

だって、これまで旅して、苦労して、ここまでたどり着いた勇者に
対してかなり失礼じゃないか！！

リゼはクスッと笑って

「俺そうそう負けないけど。それなら戦ってみる?。」

「望むところよ!。」

「ちょっとアンジェ!。」

魔王が止める暇もなく、僕はリゼに言った。
だって負ける気がしないし。
ただ魔王が焦ってるのが気になるけど。

「じゃ明後日戦おうじゃないか」

「いいよやってやろうじゃないの!。」

「ただ勝負したんじゃつまらないから、負けた方は勝った方の言う
事聞くって事でいいよね?。」

「いいね。そのほうが盛り上がりそうだし」

リゼと僕は火花を散らして睨み続け。
魔王はオドオドしながら、

「あの……。話終わってないけど」

魔王の声は二人に届いていなかった。

21話 過去（前書き）

12話を書き直しました。

追加したので、話が見えないかもしれません^^;
先に読んでもらえると嬉しいです。

21話 過去

それはリゼを追い出した後のこと。

まだ僕は部屋に返してもらえませんでした。

このしーとした空間苦手なんですが……。

魔王に目を合わせると、

「それよりどうするんだ？リゼは強いぞ」

魔王は険しい顔をしながら言う。

もちろん僕はヘラツと笑って、

「大丈夫だよ。あんなやつ僕の剣でイチコロさ」

「……難しいと思うぞ」

勝つ気満々な僕を心配そうな目で訴えている魔王。

何故さと眉を寄せ聞いたら席に戻って話すといい魔王はベットに腰かけて、僕は近くの椅子に座ったがあまり納得出来ない。

（あんなへなちょこに何が出来るのさ）

ちよつとむくれながら魔王に尋ねた。

「で、何さ」

「リゼは化学者と言っただろ？あれは伊達じゃないぞ」

「うん、で？」

あまり聞きたくはないから適当に頷きだが。魔王も気付いてかため息を一つ吐いて続けた。

「アンジエ。ここからよく聴いておけ」

「はいはい」

「油断すると殺されるぞ」

魔王に真剣な目で見られた。

何故そこまで、心配されるかが不思議で僕はキョットンとしてしまふ。

「どうして？まあ決闘だからってそこまではしないでしょ？」

「……奴は二重人格だからな」

「はあ！？もうわけわかんないですけどー!!」

本当わけわかめで、眉間にしわが寄ってしまふ。

「普段は温和なんだ。アンジエを助けたときもそうだったろう？」

「ああ。たしかに」

思い出しながら頷く。

たしかに会った時は、助けっただけだからいい人かと思っただけ、よく考えると原因もアイツだし、助言も言動も今考えると変なやつだった。

それに突然怒り出すから、短気でもあるのかあ。
この数分でこれだけ言える人物ってある意味すごいよなっとなあきれた。

「だが……。リゼは自身に対する弱さを酷く気にしてる。魔力無しだからな。だからだ、禁句ワードがリゼを否定する言葉例えば”弱い””へなちょこ”等々だ。まあアンジュは”強くない”だの魔力ナシをバカにしてたからな。もう一つの人格が出かかった」

「はあ……」

やる気ない声で、対応してしまっ。

リゼってどんだけ精神弱いんだよ。

さっきだって泣いてたし。

魔王も僕の気持ちを分かっているみたいで、つつこみはしてこないけど。

「もう一つの人格は危険だ。その所は理解してほしい」

「例えば？過去に何かしたことあるのわけ？」

「ああ。以前もキレることがあつて新開発した剣で爆発事故を起こしてる」

表情を変えず、淡々と述べられた言葉には、耳を疑いたくなった。
普通にアリエナイですけど！！

「はあ！？剣で爆発って可笑しいだろ」

「それが奴の武器なんだよ。言わば破壊ヲタクとも言おうか。キレ

ると手をつけられないし、この前は城の一部破壊してノアにキレられてたからな」

「それは地獄絵図だ……」

なんか容易にノアのキレた姿が思い浮かぶ。
昼間見たからな。苦笑が漏れる。

「それより過去には村半壊で、死者は出なかったが、けが人は50人弱で重体は数人。迷惑な話さ」

「ちよつ魔王！他人事のように話すなよ！！仮にも側近の一人ですよ？」

「だ・か・らリゼは側近なんだ。見張るため兼彼を守るためでもある」

魔王が優しい表情に変わった気がする。

それと今の言葉にどんな意味が込められているか僕にはわからなくて首を傾げ、

「どういう意味？」

「アンジェならわかつてると思ったんだがな。同じハーフとして見てもわからなかったか？」

はつとした。

なぜ魔王が知っているか、問いただしたかったが、ぐっと堪える。
これでキャンキャン吠えるように、話題に噛み付けば、認めてしまっているようなものだ。

「……知らなかったよ。リゼがハーフなんて、魔力ナシでも気付かなかった」

「リゼは魔族の血の方が多いからな。気付かれにくいが勘がいいやつは気付くさ。それに小さい頃は魔力ナシで虐められた。まあこれが原因で二重人格が出来たし、被害拡大だし、もうやってられないよ」

「って最後！！愚痴かよ！！」

盛大につっこむ。

そももう、せっかくシリアスチックだったのに、あんなにしてんのさ！的に。

「いいじゃん別に」

ぶつぶつと魔王は口を尖らせながら言う。

そんな姿が……

まあかわいいから許す！！

「しっしかたないな」

ああ。できるなら頭とか撫でたい。なあなんて妄想してると、

「アンジュ。調べさせてもらったよ。アンジュレッタ・ガーネット」

くすりつと笑う姿は、子どもながらに、魔王の風格を醸し出すには充分だ。

何故だか嫌な予感に変わる。

「なっ何をだよ」

「君のことだ」

藍色の目が止まる。

「契約のときに”あんな”条件出すんだからね。早急に調べたら、いろいろわかった」

「……そう。何もかもバレバレってわけだ」

「あの子たちを守るためでしょ？」

そう笑顔で答えられては、反論する気も起きない。

僕も頷いて、

「……そうだよ。只でさえ魔族とのハーフで、孤児院出身なのに、魔王と協力する勇者なんてありえないじゃん。裏切ったと思われる家族が……大切な人が殺されたんじゃない」

これは本当の気持ちだ。

魔王に協力するための唯一の方法。

誰も傷つかなくていい。

これでもう人質じゃなくなるわけだから。

なんだか、しんみりした空気が漂う。

はつきりいうとこんな空気は嫌いだ。

まず、魔王の表情もくらいしな。

なぜ魔王が僕ことでそう落ち込むのか、別に協力者だからってまだ1日しか過ぎていないのに不思議だ。

でもこんな表情が見たい訳じゃない。

「そんな辛気くさい顔はやめてよね。それでも元気にやってこうと思ってるだから！」

「ああ」

「だから……！！その顔が辛気くさいって言うてんだ」

僕は椅子から座ったまま、魔王の頬を両側からひっぱり叱る。柔らかく伸びる頬が笑えてしまう。

「あふんじゅ！はなふえ（アンジュー！離せ）」

多少笑えたからいいやと僕はほいと手を退ける。
赤くなった頬を魔王は擦った。
そんなに強く引っ張ったわけではないからすぐ引くと思うけど。

「これに懲りたら、もう詮索なんてするなよ？次はデコピンだからな」

「……意外にしょぼいな」

「どうでも言えよ。殴られるよりはマシだろ？それに今はリゼに勝つだけを考えてるんだから。ほっといてくれ」

ふんつと顔を背ければ、くすつと笑う声が聞こえてきた。
笑ってるのか……。

「まあ。頑張つてアンジュー」

「言われなくてやるさ」

まだこの剣術で負けたことないだもの。

勝つに行く！心に決めて、明後日の戦いに向けて、意思を固めた。

22話 ルール

雲一つない青い空に、綺麗な緑が広がる草原地帯。

いい芝生育ってます……って今はそんなこと語ってる場合じゃなくて！！

只今から、勝負の時。

目の前にはリゼが居て、隣に魔王、そして審判役としてノアが私たちの丁度真ん中に立っている。

公平に審判を下すのに魔王が選んだから、仕方無いけどとても嫌だ。どうせなら、ちゃんとした審判がいい！！なんて口が裂けても言えない。

実力は認めてるけど、変態だから。

そして、変わった人がもう一人。

さっきはあえて言葉にしなかったけど。

やっぱりスルーできません！！

今、ノアがルールの説明してるけど、叫びたい！！

『『『なんでおまえは白衣なんだ！！』『』』

叫びたくてうずうずするくらいに。

だって考えてごらんよ。

普通は動きやすくて、防御性の高い服を選ぶはず。

なのに、リゼは何故だか白衣を着ている。あとは普通に軽装だ。見る感じ防御力が高い風でもなく。

例えて言うなら初心者が初めて買う装備くらいのレベルだと見て取れるし、しかも丸腰。

僕をどこまでなめてるんだろうと思うし、どう戦うつもりだよって疑いたくなる。

「あの勇者さん聞いてました？」

「えっ？」

まさか聞かれるとは思ってなかったから、ノアの問いかけに反応が遅れた。

ノアは、はっと息を吐いて。

「その様子だと聞いてないですね勇者さん？」

「ごめんなさい」

素直に謝っておく。

これから試合なのだからルールを知る必要がある。
知らなくて違反して失格とか、ないもんね。

「今度はちゃんと聞いててくださいね。また一からの説明は面倒ですから簡単に言います」

「うん」

「ルールは絶対に魔法を使わない剣術勝負です。剣・刀・ナイフ等々、刃物ならなんでも使って良くさらに何本使おうが構いません。勝敗は相手に参った等の降参を認めたり、意識がなくなったりした時点で、勝敗が付く形式です」

なんともわかりやすい説明。

すっごいあっさりだけどさっきあんなに長かった説明はどこへいったのか。

「わかりました勇者さん？ああもちろん相手を殺したりしてはいけません。あくまでも試合ですからわかってますねリゼ」

なんだ、この言い回しはと疑問に思いながら、目の前のリゼは赤い髪を遊びながらつまらなそうに、

「わかってるよ。気絶ぐらいで、すませればいいだろうアークス？
本当なら命がけがいいけど」

「リゼ」

「はいはい。アークスに説教食らうのはごめんだ。久々に出してもらったんだ。暴れさせてもなわないと」

何故だがリゼはノアを睨んでから僕に向けてふつと笑う。

「せいぜい楽しませてもらわないとな、お嬢さん？」

僕は目を見張る。

今まで会話をしていなかったからわからなかったけど、こないだ会ったときと別人ようだ。

どこがと言われたら、どうと答えられないけど……。

明らかに殺気が含まれた目で笑われ、それに周りの空気が違う気がする。

何故だが緊張した。

丸腰の相手なのに悔しい。

悔しいのに……。

「これおいしいな」

「でしょ！頑張って作ってきたの。でもお兄さまにだからあんまり食べないでよティオ」

「これ、味濃いのよ。大味なのよ」

「文句言っなら食うんじゃね！このトリオ！」

後ろが妙にうるさい。

笑い声が聞こえる。

わかってるよ。もちろん声の主達を。

見事に僕の緊張感をぶった切るような事してるやつらは……レベツカや、ティオ、えつと……名前忘れたけどあの鳥もいるな。

きやつきゃ、きやつきゃ聞こえて耳障り、ちらつとだけ様子を伺ったが見なきやよかった。

近い所でレジャーシート開いて、お弁当を食ってるけど、ピクニックに来たのかアンタらは……！！

『どこぞの家族かよ……！！』

つてつっこみたくなる。

いや、叫んでもいいかな？

僕いつかキレそうだわ。マジで。

笑顔でティオとか、殴りたいもの。

「アンジュ顔怖いぞ。なんか笑顔なのにオーラ黒い……」

「わかってるね。さすが魔王様」

「……見ればわかるよ。誰だって」

魔王がボソツと言った。

まあいいや、どう言われようと、このイライラは勝負で発散すればいいだから。

いつの間にか、悔しい気持ちも消えてたし、後ろがうるさいけど集中してやればいいことだ。

今も、殺気を放つアイツを、止めればいいだけなんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161m/>

魔王と勇者の契約

2011年6月19日22時05分発行